

「えい、泣きますわ」

「なぜ泣くんのだ」

「兄さん」と晶子はくるりと背後を向けて「私何處へも行きませんわ。一生涯懲うして兄さんと一緒に居ますわ」

「嫁に行つても兄さんと一緒に居られるぢやないか」

「い、え〜」と晶子は首を振って「私、兄さんの傍を離れるのは厭よ」

「兄さんがお嫁を買つたら什麼する」

「兄さんが？」と晶子は霎時息を詰めたが急に「いやです。兄さんもお嫁を買はずに居て頂戴ね」

「は、は、は、は」と五郎はいかにも怵へきれぬ様に笑つた。「お前も嫁に行かず、僕も貰はなかつたら、お前と僕と夫婦になるより外に仕様がなない。は、は、は、此奴あ面白い」

「懲う言つた時晶子は袂を顔に當てたま、走り去つた。岸の鷺鳥共は翼をばたくくさせて器械の玩具の様に晶子の後を追ふた。」

「全で子供だ、は、は、は」

五郎が猶ほも笑つて居ると岩の蔭から實がぼんやりと現はれた。

「君、あの通りだよ。子供だからね、あれほど兄思ひな奴もないものだね」

「いや僕は覺悟して居るよ」と實は靜に言つた。而して地面を見詰めながら溪流の方へ歩み去つた。

「待て、僕も行かう」

二人が揃うて行く後姿を見送つて晶子は温室の前に立て居た。何とも言へぬ耻かしさが全身に漲つて假令ば非常な大罪を犯して現場を逃れて來た様な心持であつた。

「あんな事を私は什麼して言たんだらう」

頃日まで……今朝までも彼女は兄と菊子との結婚を望んで居た。菊子には勸告した。兄にも勸告するつもりであつた。だが偶然に……爾だほんの小さな動機からして、自分の望んで居る事と全然反對な事を言てしまつた。

「矢張り私は兄さんを他人へ渡したくないんだ」

彼女が漸と其れに気が付いた。
「私は兄さんに戀をしてるの知らん」

一回の終り

放浪者

大正四年の秋十一月の夜、大島隆二はそぼ降る小雨の北濱通りを傘を差さずに帽子と外套とが濡れるに任せて、静かに地上を見詰めながら歩いて居つた。兩手は衣匣に突き入れて何か物思ひに沈んで居るらしく折り折り立停まつては方向を定めるのであつた。彼は今自分の經營して居る淀川銀行を出て是から約束の御茶屋で二三の重役連と祕密の相談をすべく行くた。彼は今極めて苦しい立場になつて居る。其れは彼の銀行が餘りに種々な事業に干

知れたら銀行が破綻する。爾なると」
帽子を前のめりに直した。雨が前から吹き込むので彼の髭が濡

「あれ込んだ。彼は車に乗らずに、くく歩くのが好であつた。中にも何か重大な問題を考へるのは多くは徒歩の時であつた。」

「私の考へは決して悪くはないのだ、其れに何故新聞などで反對するのだらう」

彼は慙う考へた時俄然として人の足音が聞えた。一人二人三人四人、五六人の男が泥濘を蹴つて駆けて来る。

「何だらう」

慙う思ふ間もなく反對の東の方に呼子の笛が聞えた。今まで闐然としてゐた町の隅々には急に騒々しくなつて来た。

「泥棒が」と彼は氣にも留めずに行き過つた。霎時人々の罵る聲がしたかと思ふと急に静かになつて彼が中の鳥へ差蒐かつた時には雨は止んで二十日餘りの月が黒い雲の間に顔を出し初めた。と呼子の笛が再び聞えた。

「未だ捕まらないと見える」

彼は大江橋を渡らうとした刹那、疾風の如く驅けて来た者がある。其の苦しきうな呼吸が

嵐の様に近づいたと思つた途端彼は横腹をどんと突かれた。

「痛い」

振返る間もなく男は帽子をひよいと奪つて行過ぎた。同時に隆二の手首をぐつと攫んだものがある。

「御用だ」

「何をするんだ」

「何を此奴め」

「貴様は何だ」

「俺は刑事だ」

「私は大島隆二と言ふ者だが何のために無禮な事をするんだ」

「なに大島？さん？」と刑事は驚いて隆二を月光に透し見て「これは失禮しました」

「いや間違ひとあれば其れで可い」

刑事は直ぐ曲者の後を追ひ掛けた。

「何だらう」

隆二は其處から車に乗つて約束の雪の家へと急いだ。其處には既に二三の人達が集まつて居た。其の中にも奥田喜平も加はつて居つた。

「今日の夕刊を御覽でしたか」

と奥田は隆二を見て言葉を掛けた。

「いや忙しいので見なかつた」

「何しろ大變な事ですな」

「何が」

「日本人と偽つて大賊を働く朝鮮人が大阪へ来たといふんで大騒です」

「そんなに豪い奴か」

「金庫破りに妙を得てるさうで」

「大抵の銀行がやられるさうですよ」

「物騒だね」

「何う言つた時外は急に騒がしくなつた。」

「豪い事だつせほんまに」

「女中の一人が慌しく騙け込んで来た。」

「何が」

「盗人が貴方、盗人が捕まりましたんね」

二

仲居の話に隆二は扱はと思ひ合せた。

「して什麼した」と一人が言ふ。

「捕まりましたんや。帽子が落ちましたよつてな、顔が好う見えました。老人だつせ、」

二人で新道の横で捕まへるとな恐ろしい顔をして刑事を二人共抛り出しましたぜ」

「逃げたか」

「逃げました」

「何だらう」

「泥棒だらう」

「いや其れは泥棒ぢやない」と一人の若い紳士が言た「朝鮮人だ。今朝の新聞で見ると李成民が大阪へ来た様だ」

「李成民？」と一同は眼を見合した。

「うむ、彼奴は日本人に化けて船に乗つた事だけが解つてる」

其頃李成民と言はば韓國獨立運動の首魁として東西に出没して居る注意人物で韓國總督府は無論の事内地各警察にても其一舉一動に注目して居る。彼は六十歳に近き老齡を以てして殆ど一定の住居もなく支那に走り米國に遁れ又日本に潜み時としては山林深く隠れる事もある。彼を捕へる事は出来なかつた。二十七年の春には金玉均と共に朝鮮内政の改革を謀つて事成らず金玉均が刺客に殺されてから彼は行方を晦ました間もなく閔后は城門の露と消え日清戦争が起り朝鮮の制度が一變した。其から李成民の姿が現れた。彼の主張は朝鮮を本當の獨立國にしたいのにあつた。支那の力を恃めば支那に併呑せられ、日本の力を恃めば日本に併呑せらる。何

れに頼るも併呑は免かれぬ。其れを防ぐは國力の充實にある國民の覺醒にある。嗚呼叫んだが阿片と溫土爐に骨の髓まで痺痺した情民の眼は覺めなかつた。

彼は故國を去つて日本に來た日本の志士仁人に訴へて其の同情と義侠に依り朝鮮を救はうと計畫した。其の頃日本の政治家は多く東邦に着目した。此等の人は心の底から李成民に同情した。併し政治家にも種々ある中にも所謂有志家と稱する空疎な種類の人は政争の輿を主として眞に人間と人間との間の理解はない。彼等は饑ゑたる虎が羊を見出した。乗つて李成民を昇ぎ上げ、其の財産を絞り盡し故國の信用をも失はしめ其の上に最てしまつた。「しまつた」と李成民は思ふたが既に晩かつた。彼は日本の政治屋なる義を知つた。而して日本人は凡て斯の如きものだと思つてしまつた。

彼は故國へ歸るより道がなかつた。併し此の時朝鮮の同士は悉く彼に叛いた。何れの國でも同じである。彼は日本人を呪ふと共に我が國人を呪ふた。此の上は米に訴へるより他に道がない。去りながら彼は既に半錢の貯へもなくなつた。彼は筆賣り大道の書家となり終りに船の仲士になつた。彼の妻は賢き婦人であつた。今まで深窓に育

つた榮華の夢を破つて奮然として砲兵工廠の前に大道理髮店を開いた。
 讀者の中に或は知つて居る人があるだらう。小石川砲兵工廠前の濠端に直徑三四尺もある大きな鐵管が幾千幾萬となく轉がつてあつた事を、而して其の鐵管の中をば乞食や夜鷹などが夜露を凌ぐ住居として居た事を、而して其の鐵管の盡きる處即ち小石川橋の畔に天幕を張つて荒蕪二錢と書いた札を下けてあつた事を、其れと共に讀者は一人の婦人が臨月の腹を抱へて客の毘を刺つて居るのを見た事があるだらう。

三

内閣が更迭して楠大將が韓國の總督となつた。武斷政治？韓國の人々は楠大將の名を聞いて悚然とした。前の總督加藤侯爵は日本維新の創業に殊勳のあつた人であつたが、勳位人臣の榮を極めて居るに拘はらず凡てが平民主義であつた。其れすら韓國國民は猶ほ併合の怨みを抱いて居つた。其れに次で来るものは武斷政治の楠小太郎であつた。
 元來凡ての人は何人でも自分の職業を尊しとして他の職業を賤しむ癖がある。中にも軍人と

いふものに此の癖が甚だしい。軍人は戰爭に出る、何時なん時生命を捨てるかも知れ、死を眼前に見て居る職業である。彼等の眼から見ると他の者は暢氣で贅澤で遊びなが執つてる様なものだ。況んや少壯から千軍萬馬の間を驅け廻り九死に一生を得た老將は、其の辛苦が多かつただけ日本の國を造つたのは自分であるといふ様な矜持を有つて居る。

「今の若い奴等は口こそ達者だが眞に日本を荷うて立つの覺悟がない」

これは昔時の功勞を唯一の權威と恃む老人の言ひ種である。

井戸堀は家根齋を見て笑つて言ふ。

「此の暑いのに炎天に曝らされて仕事をするなんて馬鹿々々しい事だ」

と家根齋が井戸堀を見て笑つて言ふ。

「此の寒いのに穴の中へ入つて仕事をするなんて馬鹿々々しい事だ」

軍人は國家の最重要機關は軍備であると信じて居る。軍國主義、武斷政治、其れは永遠であるとして信じて居る。楠侯爵は其れであつた。彼は此の武斷政治を遺憾なく發揮し

味な韓國人を服せしむるには武斷より他に道がない。是れ彼の主張であつた。英國が印度に對したのも日本が曾て臺灣に對したのも其れであつた。憲兵が警察權を握つた。法律も教育も其の重なるものは軍人であつた。凡て軍人なるものは頭腦が疎放である。人情の機微に思ひ到るなどは夢にも思はぬ。鐵砲と刀劍と腕力とを生命とする彼等には亡國の民の涙が解らなかつた。其れと同時に韓國人にも大なる缺點があつた。優柔で不斷で、無智で虚偽が巧で、勞働と規律が嫌ひで、晝寢と酒と阿片と賭博が好きで、精神的に墮落した國民である。其の狡猾で怠惰な國民を向上させるには或る程度まで武斷政治が必要であつたかも知れぬ。併し國を治むるには教化が先であつて法規が後でなければならぬ。のみならず上の好む處下是よりも甚だしい。楠侯爵の武斷的命令を實行する屬僚官吏は何も彼も武斷的にしてしまつた。韓國人は只だ命令すべき國民で心服させべき國民でないとしてしまつた。

壓制、暴虐の聲が四方に起つた。敏捷な日本商人が早くも惡辣な手段を以て韓國民の家戸、地を捲き上げた。裁判官の多くは日本人である。心の僻むだ亡國民は何も彼も日本の惡政であると斷定した。

李成民が楠侯爵を刺さうと決心したのは此の時であつた。

四

婦人の理髮店はこれが日本の開祖であつた。勞働者共は争うて此の店に行つた。併し妊娠の婦人の身である。一日稼げば一日休まねばならなかつた。

「金が溜つたら米國へ行って朝鮮の保護を頼まう。」

夫婦は只だ其の一心で働いた。と夫人は段々動けなくなつた。而して或る雨の降つた夜中に彼女は鐵管の中に男兒を生んだ。嬰兒は健康だが夫人は二時間後に死んでしまつた。

途方に暮たのは李成民である。嬰兒があつては仕事にも行かれぬ。彼は嬰兒を抱て諸所を彷徨ひ、人々の情に依つて乳を貰ひ歩いたが子供の腹が太くなつても自分は一杯の飯を食ふ事が出来なかつた。

「子供と共に死んでしまはうか」
彼は兎つ角つ思案しながら町々を夢の様にとつた。

「死なれないく」と彼は叫んだ。「俺が死んだら國土が什麼なる朝鮮八道の人民が什麼なる」
 愆う考へた時は彼は子供を棄てるべく決心した。彼は兩國の橋を渡りつ返りつ、遂に東の川縁
 へ出た。路は廣い人家は多い、東京の市街は八百八町である。けれども我が子を捨てる町はな
 い。彼は其處に縋つた小船に乗つてつくぐと我子の顔を見た。秋の月は明かに赤兒を照した。
 「お前は俺を恨んでくれるな。お前があると御國の仕事が出来ないのだ。可いか解つたかお前
 一人のためにお國を亡ぼす事になると俺もお前も先祖に濟まない虚偽の多い日本人でも捨兒を
 拾ふ位の心があるだらう。此の儘捨てれば誰も朝鮮人の子だとは思はないだらう。可いか解つ
 たか、何れは親子の名乗をする事もあるだらう。お國のためだ勘忍してくれ」
 彼は泣き／＼愆う言た。舟を出ると月は益々明るい、彼は子を抱きながら人の足音に耳を敏
 てた。そして八百屋の曲り角に窃と子を置いた。
 讀者よ。これが五郎の父である。烏兔匆々此に二十餘年、其の間朝鮮は韓國となつた。日本
 の領土となつた。彼は必死となつて運動したが其れは悉く無駄であつた。彼は天を仰いで歎
 息した。

數千年の歴史を有した國土が一朝にして他の領土となり、言語や風俗を他に倣ひ、凡て異な
 れる山川草木の色を見る時には何人と雖も熱涙なきを得ない。感情の強い李成民に於ては更に
 其れである。

彼は朝に商となり夕べに農となり日毎／＼に姿を變へて八道を遊説した。慷慨の士は忍び忍
 びに集まつた。彼等の中には義兵を擧げて日本と一戦に及ぼうといふものもあり、刺客を以て
 日本の大官を殺さうといふものもあつた。併し李成民は凡て過激の行爲を否認した。

「世界の同情を失つてはならぬ事の此に至れるは我が國民が餘りに無智であるからだ。今日の
 場合は到底獨立が困難であらう。併し此の儘日本の奴隷となる事は出来ぬ。そこで吾人の取る
 べき道は韓國の政治を韓國人が執る事にある。領土は日本に併合されても、韓國人の自治權は
 飽くまでも保有せねばならぬ。」

これが李成民の主張であつた。

「それでは物足らん」と言ふものがある。

「米國に頼まう」といふものもある。李成民は頭を掉つた。

「大勢に逆らつては損があつても徳がない。過激の手段は最後にあるのだ」

五

國民が無智であるから日本から侮辱されても仕方がないとは思ふもの、同胞人民が日に日に虐げられゆく光景を見ては流石に黙つて居られなくなつた。李成民は同志と共に別れくになつて、楠、將軍を窺つた。

一度は京城の門外で失敗つた。二度は旅館の風呂場で失敗つた。三度目には埠頭で捕へられたが手錠を断つて逃げた。これが四度目である。楠、侯爵が上京する其の途を要撃しようとは二三の同志と共に大阪に身を潜まして形勢を伺つて居る。

雪の家で會合のあつた夜、隆二は晩く箕面の別荘へ歸つた。夫人の松子は頃日から持病の喘息が起つた上に心臓病で枕が上がり居る。彼女は平素が健康であるだけに病氣になると弱り様が激しいのであつた。少しばかり熱が出ても非常に苦む、而して毎も「もう私は駄目ですから子供等を東京から呼んで下さい」と言ふのであつた。

隆二が妻の室へ入つた時から五郎も晶子も枕元に添いて居た。

「どんな風か」

「今ま寝んで被居つてよ」と晶子は言つた。「御母さんは騒ぎの方が大きいのですわ」

「爾か」

隆二は漸と安心して我が居室へ入つた。机の上に諸方面からの手紙が載せてあつた。其の中に楠、侯爵からの手紙があつた。

「滞京五六日にして歸韓可致、其の折御地へ立寄り晶子の事も取決め度き考へにて候」

「讀み終つて彼は其れを細かく裂いて屑籠に抛り込み雲時机に兩肱を載せて凝と考へた。

「どうしたら可いだらう」

彼は太い溜息を吐いた。

「侯爵の意見は五郎と晶子とを夫婦にしやうと言ふんだ。其れは至極可い事だ。併し、郎が韓國人の子である事を御存知ないのだ。韓人嫌ひの侯爵が其れを知つたら必ず撤だらう。だが五郎が韓人である事は妻にすら秘してあるんだ。其れが解つたら五郎は

くだらう。あの子の前途が闇になる」
 彼は机から離れて葉巻に火を點けた。而して茫然と煙を吹いて居たが、其の眼が段々疊に固定した。

「侯爵に言はれぬ。そして只理由もなく五郎との結婚を断はると、私は晶子が妾腹だから厭がつてる様に思はれるだらう。いつそ明かにしてしまはうか」
 いや其れは出来ぬ、併し憊ういふ事は絶対に秘密に附すべきものだらうか。但しは當人にだけ

は知らしむべきものだらうか。知らした處で害があつても益のない事だ。

隆二は起つて妻の病室へ行つた。松子は熱が冷めかけて機嫌の可い顔をして眼を開いて居た。「今貴方を御迎へにやらうと思つて居ました」と松子は言た。

「何故だ」
 「少し御相談がありました」
 「子供等は？」

「もう寢みに行きました」

「して相談とは何だ」

「外でもありませんが」と松子は眞面目になり「晶子は何處へも縁付くのは厭だと言ひます」
 「何故だらう」

「五郎のお友達の高井さんと娶はしてくれと五郎が言ひますので其の話をしましたら、どんな處でも厭だから此の家に一生涯獨身で暮りたいと言つて泣きますのです」

「どうしたんだらう」

「私が考へますには晶子が私共の子でない事を知たのではありますまいか」

「そんな事はないよ。お前が言やしまいね」

「はい、言ひませんが何だか様子が變でございますよ」

「それはお前の氣が咎めてるんだ」

「私も私は憊う思ひますの。五郎の妹でない事が解つたので、それで五郎と夫婦になりたくな

「いものではあるまいかと」

「む、成程」と隆二は霎時考へて「そんな馬鹿な事は……今まで兄妹であつたものが、それ

が解つたからつて、急に夫婦になりたいなんて、そんなに引繰返るものかね」
 「い、え、人の心といふものわね」と松子は自分の手を額の上に置いた。

六

大島隆二は朝風く起きて温室の中を歩いて居た。アネモネやフレンジヤは既に苔を帯びて壇の上には小菊が今を盛りに咲いてゐる。彼は一つ／＼に鉢の位置を直して其れから椅子に腰を掛け硝子天井を突き上ぐる許の棕櫚竹やゴムや蘇鐵に眼をやつたが、鯉で深い考へに沈んだ。彼の頭は混亂しかけて頃日から宛ら重い錘が胸に支へてる様である。

「どつちかに形付けなければならん」

形付けねばならぬ事が山の如くあるが、彼は今晶子と五郎の事を思つてゐるのである。五郎が可愛い、晶子も可愛い、二人とも我が子でないが可愛いに優秀がなかつた。五郎は快活で熱情的で頭腦が明晰で非常に決断力に富んで居る。何から何まで隆二が氣に入つて居る。
 「あの二人を夫婦にする事が出来れば私も實に安心だ」

彼は悠々考へた。出来る事なら爾したい。併し韓國人を侯爵の掣にする事は什麼しても忍びない。縦令侯爵が御存知ないにしても其れでは侯爵を欺く事になる。

「私は虚偽の生活をして居るんだ」

彼は不圖悠々考へた。これは今まで幾度も考へて考へ及ばなかつた處であつた。ほんの偶然に悠々氣が付くと今までの凡てが虚偽である。

「侯爵の令嬢を我が娘と偽つて居る。韓人の子を我が子と偽つて居る。其の上に私は妻を欺き侯爵を欺き、世間を欺いて居る。これは什麼いふ事だらう」

欺く事は常人の幸福になる事だから欺いても構はん。これが今までの持論であつた。併し其れが果して眞理だらうか。世間には貰ひ子をして終生我が子だと思はしめて居る例が幾らもある。其れはお互の間に氣拙い事のない様にとの手段だらうが、血を偽る事は罪惡であるまいか。一人の人間をして生涯本當の親を知らしめぬのは天理に背く行爲であるまいか。

翻然として此に思ひ到ると彼は思はず悚然とした。

「さあ是が問題だ。併し此方に決めなければならん」

彼は再び室内を歩き出した。

「どうして恚う種々な問題が湧いて来るのだらう」

實を言ふと彼の身邊に集まつて居る問題は是ばかりでない。だが彼は此問題の決心が付かぬ中に次の問題が胸を突いて上つた。と此時奥田の策齋頭が見えた。

「此方で被居いますか」と奥田は二つばかり御辭儀した。

「あ、奥田さん、銀行の方は什麼なりましたか」

「はい、どうも結果が面白くありませんので」

「日本銀行は？」

「引受けてくれませんか」

「東洋銀行は？」

「是もさうも」

「では絶望ですね」

「はい」

隆二は椅子を奥田に薦めて「では他に策がありませんか」

「はい今の處では」

「破産ですかなあ」と隆二は歎息した。

「はい、どうも」

隆二の經營して居る淀川銀行の破綻は頃日一二の新聞で噂せられて居る。隆二を信ずは此の報道を信じなかつた。併し實際は破綻に近づきつゝ、あるのであつた。

七

さしも飛ぶ鳥も落す勢力の大島隆二が何故破綻に近づきつゝ、あるのであらう。其れに

がある。元來隆二の銀行に對する意見は他の所謂銀行屋とは全然反對である。普通の銀行家は貯金を集めて其を資本に擔保を取つて貸附をする。そこで利子を生む、恚ういふ風に銀利を目的とするものだといふ事になつて居る。だが隆二は恚うである。銀行は殖利を日

るものではない。萬民の貯蓄した金を利用して國家有益の事業に投資するのが銀行の性質である。即ち銀行は第一に國家の利害を本位とすべきもので個人若くは銀行の利害を顧みるべきのでない。どうせ不要な金を積んで置くのだから、其れを活かして使ふのが銀行の義務である。故に銀行としては多少の損失があつても他に補填の道がある以上は國家のために最も有益な事であれば遺算段をしても其れに當てねばならぬ。

隆二の此の議論は銀行家達に用ひられなかつた。そこで彼は獨力で淀川銀行を起した。某紡績會社が倒れかけた時彼は行つて其の工場を見た。すると案内者の社長が動きつゝ、ある糸の切れたのを見て手づから其の糸を繋ぎ合せた。

「此の男は仕事に忠實だ」
此の簡單な理由の下に彼は數十萬圓の貸附をした。曾て營口の水道敷設權の件で大問題が起つた。其れは右水道を米國人が買ひ占めやうとしたのである。時は日本の財政最も困難の場合である。これを買ふにも資金がない。軍備擴張には巨大な豫算を吝まぬが、水道敷設權が何れだけ重大であるかを知らぬ内閣員達は見すゝ米國人に占取さるゝに委せやうとした。此時、補

大將が馬車を飛ばして隆二を訪ねた。

「貴公は日本人か什麼か」と大將は言つた。

「日本人です」と隆二は呆氣に取られながら答へた。

「それぢや營口の水道敷設權を買つてくれ」

「よろしい、引受けました」と隆二は答へた。同時に彼は銀行の全力を犠牲にして資金を調達した。而も其れは隆二の懐を肥やしたのでもなく淀川銀行が金儲けをしたのでもなかつた。單に國家のため、日本の權利のためであつた。今日でこそ六甲電車や奈良電車は素晴らしい成績を擧げて居るが、隆二が此の事業に着手した時には例の銀行屋達は冷笑した。

「大島は氣が狂つた」

人々の罵詈雑言を聞き流して隆二は快心の微笑を浮べた。

「今に彼等が解るだらう」

彼は此の電車に依て會社が幾許の利益を得て幾割の配當をなすかといふ事などは殆んど算盤珠に入れなかつた。六甲の山の彼方と大阪との交通が出来る。生駒の山を越ゆる不便を去つて

一時間内に奈良と大阪の交通が出来る。それに依て日本の運輸工業、農業が如何に發達するか彼の胸に往來して居るのは單に其れであつた。彼の投資した事業は是ればかりでなかつた。苟くも國家有益の事と見れば何の顧慮もなく其れを援助する併し銀行の資力に限りがある。隆二の手腕にも限りがある。同時に十餘の事業を經營したので功績が擧がらぬ中に資金が續かなくなつた。最も大なる打撃は紀州の隧道である。工事は豫算に數倍した。地層が脆いので掘れば崩れる、積みば崩れる、人夫が雪崩に埋まつて死ぬ、世人は益々嘲笑した。併し隆二は動かなくなつた。

「私のする事は善い事が悪い事か」
 「善い事に違ひありませんが」
 「善い事はしなけりやならん、何も言ふ必要がない」
 彼の言ふ處は簡單であつた。

淀川銀行が紀州の隧道に埋まるだらう。と新聞は書き立てた。慙うなつて來ると凡ての形勢が悪くなつて來る。彼の唯一の綱と恃むは日本銀行ばかりであつた。彼は上京して日本銀行總裁に談判した。總裁は首を横に振つた。激しい議論が二人の間に交された。併し日本銀行の金は隆二の力では什麼する事も出来なかつた。

隆二は今奥田の報告を聞いて、最早策の施しやうのない事を知つた。彼は沈黙した。

「處で其の只だ一つの策がありますので」と奥田は言つた。

「策とは？」

「紀州鐵道を他に讓渡す事です」

「讓渡す？」と隆二は憤然として「私が計畫した事業を他に讓渡す事は死んでも出来な、他に依託といふ事にしましたら」

「其れは同じ事だ」

隆二は暫く室内を歩き廻つて。

「奥田さん、今至急に必要な金額は幾許ですか」

「差迫つて今日に必要なのは二十萬圓、一週間後には五十萬圓」
 「都合七十萬圓」

「して銀行にある金は？」

「凡て、一萬圓もございませうか」

「たつた？」

「はい」

「では二十萬圓は什麼しても要るか」

「はい」

「可し、手形を書かう」

「手形を？」

「不渡になるかも知らん。奥田さん、何處かで都合が出来ませんか」

奥田は頭を撫で、は鼻を撫で、居たが急に、
 「よろしうございます、何とか致しませう」

「頼みますぜ」

「若し不渡の場合には？」

「其時は其れまでの事だ」

「よろしうございます」

奥田は静かに室を出た、隆二は激しく室内を歩いて何事か口の中で言つた。やりかけた事業世間の信用、淀川銀行の運命を繋ぐには不渡手形でも何でも書かねばならない。無論其れはほんの一日凌ぎの事であるが、人間は百年よりも一日が大事な場合がある。

「私に覺悟がある」

彼が恚う言つた時晶子が珈琲を持って入つて来た。

「御父様、珈琲を召上れ」

「うむ、難有う」

晶子の顔を見ると什麼な屈托も忘れてしまふ事が出来る。最早や二十一になるが全然子供の様に黒眼勝な眼をばちくさして何か滑稽な話でも仕掛けたいと言つた風に微笑を含んで父の

顔を眺めて居る。

「御菓子は何御父様、私が拵へましたのよ」

「あ、爾か、御自慢なんだね。は、あシユークリームか、馬鹿に皮が厚いな」

「厚い方が新式なのよ御父様」

「それは新式過ぎるよ」

つい釣り込まれて冗談を言ひながら隆二は晶子の方を見やつた。二人の眼と眼がぴつたりと合つた時、晶子の眼に充滿の涙が溢まつた。

「御父様」と彼女は聲を顫はして言つた。「御父様は何か御心配が御ありなのでせう」

「いや何も」と隆二は慌て、答へた。

「でも御顔色が悪いわ」

「なに寢不足だよ」

「爾？其れなら可いけれども」

恙う言ひかけて晶子は再び父の顔を見詰めた。

九

父は頃日沈み勝である。顔もめつきり衰へて白髪の殖えたのが目に立つ。何とかして慰めてあげたいと晶子は獨り胸を痛めた。

一日二日と經つ中に形勢が段々不穩になつて來た。父は終日大阪へ出て奔走してゐるらしい。夜は晩く別荘へ歸る。或は二日も三日も歸らぬ事もあつた。如何なる多忙の時でも外泊する事のないのが父の規定であつた。其れが今殆んど晝夜の別なく父が運動して居るらしい。新聞にはそろそろ淀川銀行の破綻の噂が掲初めた。

「病中の御母様に此の事は知らしたくない」

晶子は毎朝早く起きて其日其日の新聞を檢閲し、母に見せて差支のないものだけを見せる事にした。夜は二時頃まで父の歸宅を待つので彼女の睡眠時間は僅かに三四時間であつた。

或る恐ろしく雨の降つた夜であつた。嵐は萬樹を揺かして水嵩増さる溪流は今にも此の別荘を洗ひ去るかの如く轟々と響いて居る。晶子は女中達を寢かして自分獨り編物をしながら父を

待つて居た。此頃の模様では御父様の身の土に大變な凶事が湧いて來さうだ。其れを逃れるには何とか方法がないものだらうか。若し御父様を救ふ事が出来るなら私は此の生命を棄ても構はない。彼女は慙う考へた。

「私は女でも御父様の役に立たない筈がない」
凝と壁を見詰めてる中に涙がほとくと零れた。

「私は侯爵の娘でありたくない。私は御父様の子だ。何と言つても私の御父様は今の御父様だ。此の事は御父様にも言ひたくなし、私も、う決して思ふまい。世界がどんなに廣くても御父様ほど善い人はいないんだもの」

子供の時から、どんなに泣いてる時でも御父様が「晶ちゃんどうしたよ」と一語言へば直ぐにこくくして御父様の髭を引張つたり何かしたものだ。どうして斯様に御父様が好きなんだか自分にも解らない。

編物の手を止めて暫時考へてる中に、晶子の眼はちらくくして室の中が只だ白と玉子色の光線が縦横に動いてる様に見えた。彼は眼を擦つて又た編物を見詰めたが、聴て頭が段々に低れ

て兩手を覺に措いたかと思ふと其の間に顔を埋めたまゝ、眠つてしまつた。彼女は疲れたのである。

晶子が眠つて居る室は静かである。明るい電燈が其の房々とした髪や白い額や眞直な鼻や紅い唇を照した。外は暴風雨である暗い夜の色と雲の色が戦つて居る。疲れた晶子は其れも知らぬ氣にすやくと眠つて居る。眞白い腕に髪がふわりと掛つた。肅しやかに足を裾に包んで、襦袢の端が微に膝の邊りに漏れる。

びしよ〜に濡れた隆二は襖の間から竊と入つて來た。外套と帽子は玄關に脱ぎ棄てたと見えるが、袖も裾も絞るばかりである。彼は誰かを呼ぼうとしたが、晶子の寢姿を見て急に立停まつた。而して凝と其の寢顔を覗いた。

「私を待つて居たんだ。此の嵐の夜でも私が歸ると信じて居たんだ」

隆二は瞬きもせず睨めたが、忽ち其の眼は潤ひ力なき手をだらりと下げたまゝ、溜息を吐いた。突然晶子は起上つた。

「あら御父様」

「今ま歸つたよ。起きて居なくなつて可いんだ」

「私、居眠りして居ましたのね、御免下さい御父様」

「なあに頃日御前は私の事でいろくな疲れがあるんだからね」

「い、え私、うつかりして眠りましたのよ。あら御父様、びしょ／＼になつて、御召替なさいませぬ」

「待つてくれ」と隆二は晶子を制めた。「私は直又出て行かなきゃならん」

「あら此の暴風雨に？」

「うむ、一寸ね、御前の顔を見に来たんだ」

「では御父様、銀行が？……」

隆二は黙つて首肯した。

10

暴風雨は益々募つて、溪の音、雲の叫び萬樹のざはめきが乾坤を揺る様に押寄せらる。

「銀行の事はうまく行きませんでしたの？」と晶子は重ねて言つた。

「うむ、私は、うまく行く事を好まんのだ。私は上手に世渡りする事は出来ん質だからね」と隆二は笑つて「晶子、御前は御父さんを什麼思ふか」

「御父さんは善い人ですわ」

「善い人か」

「正しい人ですわ」

「うむ、其れだ、晶子、能く言つてくれた。私は利巧な人間、腕のある人間と言はれたくない私は正しい人間であれば可いのだ。其れが世間は解らない。解つてくれるのはお前と支配人の石尾許りだ」

「もう一人ありましたわ」

「誰だ」

「兄さん」

「うむ、爾だ。五郎とお前があれば私は満足だ。多くの人の金を預かつてる職務だか

境に臨むと、もう凡ての罵詈雑言が悉く私の一身に集まるのだ」

「世界中の人が御父様の悪口を言っても私は何とも思ひませんわ。――替が荆の冠を被らせられて磔刑にされましたわねえ御父様」

晶子は感慨極まつて涙を零しながら言つた。

「爾だ、私は基督の萬分の一位にも當らんが私の正しいと信ずる道の上に於て荆の冠を被せられて盜賊と一緒にされる事は決して耻辱と思はん」

「私も耻と思ひませんわ」

「うむ、其れを聞いて私は安心した。刑罰も侮辱も恐ろしくないが、お前達を肩身が狭く暮らせるのが口惜しいそればかりでお前に會ひに来た」

「ではお父様……」と晶子は愕然と眼を舉げた。

「時に依つたら私は監獄へ行かなきゃならんかも知らん」

「監獄に？」と晶子は顔色を變へた。父は慌て、晶子の聲を制める様に手を振り奥の方を見やつて「御母様は？」

「お寢みになつて居ます」

「爾か、可しく、御母様には何も言ふなよ。病氣に障るからね」

「はい、でも御父様、どうして監獄に行かなきゃならないの？」

「それが世の中だ。精しい事は石尾に聞くが可い」

石尾といふのは隆二の唯一の忠義者である。

「では御父様、どうしても何とかありませんの？」

父は答へなかつた。而して「私の主義は未だ日本に早過ぎたかも知らん。では晶子、母さんの事は頼むよ」

隆二は濡れたまゝで起ち上つた。

「被行やるの？」と晶子は泣聲になつた。

「うむ、仕方がない」

「御父様！」と晶子は起つて父の胸に顔を埋め肩先に掛けた手で力強く父を惹き寄せた。「もう少しね、もう少し」

美しい髪が顔へて逆吃りあけるたびに胸の鼓動が苦しげに響く隆二は晶子をぐつと抱きしめて天井を見上げて涙を零した。

「未だく間がある。監獄へ行くにしても一週間や十日以内といふ事はないんだから御父様の顔が見たくなつたら大阪へ出て御出ね」

「はい」

「五郎にも後で善く言ってくれ」

「はい」

「ぢや、急ぐからね」

「御父様、お母さんに會つてあけて下さいね」

「さあ」と隆二は額に手を當て、「うむ眠つてる顔でも見て行かう」

一一

隆二は直に松子の室へ入つた。晶子は此上に父の悲しい顔を見るに忍びなかつたので襖の隙

に待つて居た。

直に父は出て来た。顔は恰らに土の如く血色が無かつた。

「御母様は御眼覺めにならなくて？」

「能く眠つてる」と父は言た。

「起しませうか」

「いや、其の儘にして置いてくれ」

晶子は父の洋服を出して着替へさした。而して新しく外套も替へた。

「帽子は？」

「帽子だけは是で可いよ。あ、お前の御蔭で着替へたら氣持が能くなつた」

暗い廊下を二人は落人の如くこそく歩いた。玄關を開くと風が颯と疊に満ちて、天は碧潭の色に星の光がちらく見へた。

「雨が止みましたのね」

「又降るかも知れんな」と父は淋しく天を眺めた。

「電車は？御父様」

「會社の貨物車で行くから可いよ」

父は晶子の出した洋傘を手に取りながら凝と晶子の顔を暗に透して見た。

「晶子」

「はい」

「私は今までお前に不親切な事をした覺はないのだが什麼思ふ」

「私御父様ほど私を可愛がつて下さる人はないと思ひますわ」

「其れで可い、私も親らしい務は果たした積だが、未だ一つ氣掛りになつてるのは」

「風は聲と吹いて雨戸や門の扉をがたくさせた。父はよろ／＼となつて又立停まつた。

「何ですの御父様」

「いや何でもない」

父は怒う言つて沓脱石を降りた。

「では御母様の事は頼むよ。萬事五郎に相談してね」

「はい」

晶子は泣くまじと下唇を噛みしめた。

「は左様なら」

父様……」

「う可い／＼」と父は急ぎ足に雨に濡れた敷石を歩き出した。帽子と身體の輪廓が段々暗に

して、門を出たかと思ふと顔だけが白く朧に見えた。父は此方に向いたのである。

「御父様」と晶子は跣足になつて門まで走つた。

「う可いよ／＼」

父は言ひながらずん／＼遠ざかつた。だら／＼阪の兩側は紅葉と松である。木立は暗いが路

は微に明るい、父の姿が段々小さくなつて突き出た梢がざわ／＼と動いて居る處で遂に見へ無

なつた。

晶子は門に立つて聲を忍んで泣いた。烈風が髪を吹いてばら／＼と大粒の雨が落ちて來た。

門を閉めて家に入ると父の脱ぎ棄てた濡れた着物が其の儘に残つて居る。襦袢や襯衣に肌の

温みも残つて居る。晶子は其れを衣桁に掛けて霎時見詰めたが、魎て顔を押し付けて又もや泣き續けた。

「誰だい」

母の聲が次の室に聞へた。

「誰だい」

二度び微に言ふ。

「私よ、母さん」

「あ、爾かへ、未だ寝まないのかへ」

「えい、風が吹くもんですから」

「爾かへ、お前誰かと話して居たのぢやないかへ」

「い、え母さん、誰も」

「では夢であつたかしら」

晶子は胸が痛くなるまで涙を抑へた。

「これは三角棚の上に置ませう、私は御説教者のトルストイは大嫌いよ。人生はそんなに遊ばないんだもの、だけれども五郎さんがお好なら仕方がない。成るべく見郎さんと話をして居ても此の御爺さんの顔を見ると恐い伯父さんに睨まれ

室の絨氈に幾千冊とも知れぬ書籍や斜になつた本棚や卓子や椅子や油繪のいろんなものが秋の日射に明るく照されてきら／＼する中に被履を穿いた石膏を弄くりながら菊子は獨りで笑つた。

それから飯はどうする積ですか」

「ふのよ」

「から井にして置かう賛成だわ」

「濟むと菊子は獨りで嫣然して一枚の寫眞を取上げた。

てくれなければ掛ける處がないわ。此の中で五郎さんは一番能く寫つてる」
人の友達と共に五郎が撮た寫眞であつた。

着物の前をきちんとすれば可いのに至で腕白小僧の様だこれでは」
「た眼を窓の方へ向けると、落日沈々として西の方へ紅い雲の流れに傾きかけて居た
は凡ての物、假令ば向ふの森、屋根、小路、その間を點綴する電信柱に至るまでを紅
而して同じ紅さが窓から此の室内を彩どつた。彼女は少しく眼を細めて恍惚と其の方
なつて舞踏でもしなければ感情の遣り場がないと言つた様。そこで彼女は矢鱈に本を積み上
けて吻と呼吸を吐き、

「私一人ではやりきれないわ、誰か来てくれなければ」
「慙う言ひながらも彼女は次に一冊の小説を見付け出した。それはゾラの「ナナ」といふ本であ
つた。彼女は曾て其を読んだ事がある。人間は一生の中には五返も十返も戀をするものだが、
其中に本當の戀はたつた一つだけだと主人公のナナが言つた事を想ひ出したので彼女はバラバ

ラと頁を繰て其れを見出さうとしたが見出せない。そこで彼女は本を置いて考へ、
「全く爾だ、だが本當の戀でなければ涙が出ない。嬉し涙にしる悲しい涙にし
であるとなナが何故言はなかつたらう」

彼女は再び嬌然した。彼女は只だ幸福に充たされた。今日此の家へ引越して、
と自分と三人の新世帯が始まるかと思ふと明日からの月日は光に充ちて居る。
「土瓶とバケツを買つて来たよ」と兄の聲が聞へた。

「御苦勞く、だが君、飯はどうしやう」と、
「おうく素敵、此の肖像はダンメンツイオだ。私は死の勝利や岩上の處女で此人の血の燃へ
る様の戀物語を読んでどんなに嬉しかつたらう此の人の毎も戀か死かといふ生命がけの戀な
んだもの、ピナも飛行機に乗つて傲文を撒いたといふのを聞いて私は厭になつた。詩人ら
をここになると蜜蜂の生活から人生を覗かうとしたマールリンクの方が詩
何處かへ抛り込んで置かう、何か素敵なものが欲しい。私はアダムとイブ
が欲しいんだけど何故誰も畫かないんだらう」

「けたかへ」と下から五郎の叫ぶ聲がする。

「妹は駄目だ、僕が焚くよ」と兄の聲、

「當り前だわよ」と菊子は二階から怒鳴った。二人の笑聲が起つた。

一三

菊子は熱心に室を形付け初めた。彼女は重い卓子を曳摺つて室の真中に置き、其れに按排能く椅子を並べ、其れから一冊づゝ書籍を棚に入れた。彼女は先づ日本書と洋書とを区分し其れから更に其中の哲學、理學、政治、經濟、脚本、小説、詩集といふ風に分類した。實は書籍の事は五郎に聽かなければならんと思つたが、其れよりも自分の區分の如何に巧であるかを五郎に誇りたかつたのである。

平素には横のものを縦にもせないのだが何か仕事に取掛ると殆んど夢中になるのは彼女の特質であつた。汗は額に滴る、身體がじめじめとする、彼女は段々腕を捲くり上げた。而して凡

てを整理し終つた時には日が既に沈みきつて、夕暮の懐かしい空色が穩かに窓の外に彼女は大分疲勞を感じた。ぐつたりと椅子に凭れて室中を見廻せば書架が燦々と光つ壁の色は仄かに白い。

「誰か釘を打ちに来て頂戴よ」と彼女は鼻聲で言た。答がない。

「今日からあの人が此の室に陣取つて居るんだ。爾すると私は朝から晩まで話しに来、外國の小説や音楽や美術の話を知り、爾すると兄さんが邪魔をしちや不可いと言ふ。兄さんは文學者でないから私達の話は解らないんだもの、それでも私はどしどし質問する。あの人は親切に答へて下さる。實際あの人は親切だ。あの人は私を愛して居るんだもの」

彼女は獨りで慙う言て微笑つた。而して其の紅い下唇を細い指先でぱち／＼と弾いた。

「爾が知らん。爾だわ、あの人が私を見る時の眼が確かに爾だわ、でも私があの人を見る時にどんな眼をして可いか知らないんだもの」

凡てが嬉しく凡てが明るい。彼女の眼前に幸福の女神が微笑して立て居る。

「兄さん、鐵槌と釘」と彼女は壁を見廻して言つた。矢張答がない。そこで彼女は階段を降り

た。

「其れは不可よ」と兄の聲がする。

「いや僕は藝術萬能主義だ」と五郎が言ふ。

「併し藝術を以て國家を治める事が出来んね」

「凡ての人民が藝術的になれば國家に政治機關が要らなくなるさ、元始に復るんだからな」

「其れでは君は人間を進歩させるのでなくて逆戻りさせるのだ」

七輪に載せた錫から湯氣を吹いて玉葱や牛肉がぶちくと煮立つて居る。其れを挟んで三人は箸を持つたまま、議論して居る。

「あら酷いわ、私に知らせないで」

「敬し、議論が始まつたんで忘れて居た」と五郎は言つた。

「何の議論なの」と菊子は其處に坐つた。

「國家論だが、まあ止さう」と實が言つて肴後を顧みた。床の間に藤田東湖の正氣歌の石が掛けられてあつた。

「又た兄さんの忠君愛國論なの？」と菊子は媚びる様に笑つた。

「お前にや解らんよ」

「解つてるわ」

「菊さんは什麼思ひますか」と五郎が言ふ。

「私はね、自由であれば可いわ。人間は御互に好きな事をして暮せば可いちやないの、」

批評したり悪口したりするのは悪いと思ふわ。人に依て道德が異ふぢやないの」

「お前は享樂主義だ」と實は言つた。

「えい爾よ、私は私のために生きてるんですもの」

「それぢや國家は什麼する」

「國家なんて要らないわ」

「お話にならん」と實は吐き棄る様に言つて、

「大島君は藝術主義、お前は享樂主義、僕は國家主義、妙な三人だね」

「僕だつて國家を愛するよ」と五郎は言つた。但だ君は今までの日本の道德や習慣を完全

と見て居るんだが、僕は不完全なものだと見て居るばかりだ」

「肉が焦けつくわ」と菊子は言った。此時表の方に聲がした。

「電報、大島五郎さん」

「電報？」

菊子は起つて電報を請取り、

「あら晶子さんからだわ」

「讀んで見て下さい」

「急用あり直ぐ来て下さい」と菊子は讀んで、「被行やる？」

「行かなきゃなるまい」と五郎は電報を手を取つて又讀み返した。

「あら折角引越して来たのに」と菊子は落膽して言つた。

一四

晶子のはがつかり疲れて手水鉢の前に立つた。頃日の暴風雨に庭はすつかり變り果てた。樹樹

の枝が露はになつて、薄い日の脚がはつきりと木立を透して見える。草の色は少しく紅らんで赤蜻蛉の群が垣根の竹に宿まりつ飛びつして居る。

「兄さんから何とも返電がない」

彼女は片手を帯に挟んで凝と手水鉢を見詰めた。が聽て豆竹に宿まつた蜻蛉の数を數へた。

「奇數だつたら不可いが、偶數だつたら御父様の災難が遁れられる」

其れは奇數であつた。又た數へる又た奇數である。蜻蛉が二つ三つ飛んだ處で又復數へる。

「あ、偶數だ」と彼女は吻と息を吐いた。此時座敷で母の聲がした。

「御召になつて？御母さん」と彼女は聲を掛けながら直ぐ嬌然やかな顔をした。胸に餘る心配がありながら母には愁ひを見せる事は出来ない。

「御召になつて？」

腰硝子から中を覗くと母は快く眠つて居る。晶子の中に入らうともせず又た庭を見詰めた。

「私が候爵の娘であるなら、候爵に頼んで御父様の難儀を救つて貰はうかしら」

いや〜と彼女は胸に答へた。其那事をして却つて御父様に御迷惑が掛る様な事があつては

不可い。」

朝に起ると佛壇に燈明を捧げて拜む、晝にも拜む、晩にも拜む、朝日を見ても夕日を見ても拜む。

「どうか御父様を御助け下さい」

此の心苦しい中に彼女は母の看病をしなければならぬ。

「何か面白い話がないかへ」

「えい随分あつてよ」

心にもなき作り話に母を慰めつ、腹の中で泣いた。生れて二十一歳、浮世の波が一度に彼を巻き上げた。父の子でないとふのが一つ、五郎に對する戀が一つ、父の災難が一つ、母の病氣が一つ、四つの苦みは深窓に育つた彼女の堪へ得べき筈がない。

「晶さんく」と母の呼ぶ聲が又た聞えた。

「はい、お母さん」

障子を開けると母は今日覺めた許である。

「お呼びになつて？」

「あ、御父様の處へ使を出したかへ」

「い、え母さん、御父様はね、東京へ被來つたんですと」

「爾かへ」と母は合點ゆかぬ顔をして「どうして家へお知らせにならないんだらうね」

「急用なんでせう？」

「爾かね、でも何だか私は御父様が大阪に被居る様な氣がする」

「どうしてなんでせう」

「爾ね」

母は其れなり何んにも言はなかつた。と女關の方から足音がした。と思ふ間もなく五が現はれた。

「あら兄さん」

「お母さん、只今」と五郎は母の枕元に坐つた。

「五郎さん、どうして來たの？」と母は不思議さうに言つた。

「あの晶さんから電：。」と言はうとした時晶子は直に打消す様に言った。
 「兄さんはね、學校の修學旅行で此方へ来たんです」
 「怒う言つて晶子は兄に胸せしながら、兄さん能く被來て下すつたわね」
 「大學でも修學旅行があるのかね」と母が言った。
 「つまり調査ですよ。歴史の實地調査で」と五郎は慌て、言つた。

一五

母は又もやすやくと眠つた。晶子は起て縁側に出た。五郎も續いて出た。
 「兄さん」と晶子は庭へ降りてから言つた。今まで泳へに泳へた悲しさが兄の顔を見ると氣が弛んで、もう何んにも言ふ事が出來ずに歎歎あけた。
 「どうしたんだ、電報で吃驚したよ」
 「兄さん、大變なのよ」
 「何が」

庭の徑に小菊が咲いて居た。葉雞頭は嵐に折れて、美しい日の光に露草が輝いて居る。晶子は涙ながらに父の一伍一什を語つた。

「爾か」と五郎は歎息した。聞く事毎に驚く事ばかりである。

「御父様は餘り手を伸ばし過ぎると思つたよ」

と五郎は言つた。

「でも御父様に悪い事はありませんわ」

「無論悪くはないさ、併し世間には嫉妬が多いからな」

「何とかならないものでせうか」

「さあ」と五郎は腕を拱んで金の事だからな：。「して御父様は？」

「大阪でせう？二度と家へは歸らない積で被行たんですわ」

五郎は霎時眼を露草の上に落して考へたが聽て「晶さん」と力ある聲で言つた。

「お前は御母さんの看病をしてくれ。僕は僕の出来るだけの運動をするから」

「でも當があつて？」

「當は無い」

「どうなさる積なの？」

「僕は實業家を説くのだ」

「説いても駄目ですわ」

「駄目でも説破する。大阪の實業家は少くとも御父様の恩恵を知つて居る筈だ」

「爾？」

「確かに爾だ、ねえ晶さん。恚うなつて見ると僕等が今まで贅澤に學資金を出して貰つて居たのが濟まなと思ふね」

「えい、私もピアノなんか買つて戴かなければ可かつたと思ひますわ」

「御父様に苦勞が多いのを少しも知らなかつた。僕が下宿屋の階で文學が什麼の、藝術が神聖だのと言つてる刻一刻に御父様は瘠せ衰へて行つたのだ。止めた、僕はもう學校を止める、藝術も止める、凡てのものよりも父と苦勞を共にする事が一番大事なんだ」

五郎は涙ぐむで恚うしみくと言つた。

「私も我儘だつたわ」と晶子は涙を拭いた。

此時向ふからのそく一心に地上を見詰めながら来る男がある。彼は二八の居るのも知らぬ様に飛白の袴を裾から端折つて草履を穿いた汚い足をのたりのたりと運んで来る。

「六藏君」と五郎が聲を掛けた若い男は、びたりと足を停めて、

「あ、五郎さん、來ましたね」

色の黒いと言つたら天下無類で、其代りに齒の白いのが目立つ、毬栗頭で、胴が太く、遅く緊張した五體は誰が見ても腕力が強いだらうと思はれる。

「あ、今着いた許だ」

「僕、待つて居ましたぜ」

「何か用か」

「僕には用がありません、貴方から何か御用があるだらうと思つて、

「どうして？」

「御父様の事で」

「君知つてるのか」

「知つて居ます。僕は思ふに、此の急場を救ふには淀川銀行に火を放けるが一番可いと思ひます」

一六

六藏といふ青年は今年廿二で父を石尾傳八と言ふ。傳八は淀川銀行の小使であつた。銀行の金二千圓を他所へ届ける途中、掏兒に盗られて首を縊つて死なうとしたのを隆二に助けられ、のみならず忠實の廉を以て其の二子六藏の學資を給してやつて中學校を卒業させた。大島家との關係は恰ら主従の如きものであつた。

「お前は大きくなつたら旦那様の御恩を忘れちや不可ぞ」

傳八は其ればかりを六藏に言つて聞かした。傳八は段々取立てられて大島家の支配人にまで昇進した。それでも彼は別荘の背後の小さな家に住んで決して絹物を身に着けなかつた。山へ行ては木を伐り其れを乾かして下駄を造る。年々夏になると隆二からバナマの帽子を貰ふのだ

が、其れは貧乏な社員などに呉れてやつて自分は夏冬共に黒の中高の帽子を被つて居る。恠ういふ父の血を受けた六藏は其れよりも變り者であつた。父子共に沈黙家であるが六藏は父よりも沈黙であつた。一日同じ室に居て一言も話をせぬ日があるといふので評判になつた。六藏は體格が強壯で中學時代には相撲や柔道や水泳や擊劍の選手であつた。學課は劣等の方だが、正直で單純なので友達に愛された。彼は大島家の命令なら何んな事でも聽いた。彼は新聞で其の主人が破産しかけてると知つた時に驚いて父に訊いた。

「お父さん、どうしたら可いだらう」

「お前はお前に考へろ、俺は俺に考へる」と父は言つた。考へると言はれて彼は一生懸命に考へた。そして五郎の來るのを待つて居た。

「銀行に火を放ける！」と五郎は驚いて言つた。

「なぜだ」

「火を放けて焼いてしまへば、證據も何も無くなるし、金を預けた人も氣の毒に思つて催促しない」

これが六蔵が有りだけの智慧を絞つた案である。

「そんな事をしたら罪が更に重くなるよ」

「重くなりやしません。火を放けた本人が解れば可いんでせう」と六蔵はぶつきら棒に言った。

五郎は凝と六蔵の顔を見詰めて「六蔵君、君がそんな事をするに御父さんが大變な事になるよ」

「爾でせうか」と六蔵は首を捻つて、「それぢや貴方は什麼しますか」

「僕は實業家を説き廻るんだ」

「腕力仕事で役に立つ事がありませんか。どんな奴でも殴り殺します」

「そんな事は止し給へ」

「爾だ、私は今日悪口を書いた新聞社を叩き毀しませうか」

「輕率な事をしては不可よ」と五郎は儼然と言つた。

五郎は直ぐ着替て大阪へ出た。彼は第一に銀行を訪ねた。父の姿が見えない。そこで彼は多年の父の股肱となつて出世をした實業家達を歴訪した。

「無論です」と實業家達は快く答へた。

「貴方の御父様を失敗さしては私達が世間へ顔向けが出来ません。どんな事があつても御用を務めます」

何れも同じ返事である。五郎は吻と安心した。

「あ、上方贅六といふけれども大阪人は實に立派な紳士ばかりだ」

非常な喜びを懷いて彼は再び銀行を訪ねた。銀行の前は人の群を以て埋まつて居た。群は先を争うて支拂口へと雪崩れると押すなくと叫ぶもの、退いてくれくと叫ぶもの、雜然騒然鼎の湧くが如くである。

入口の扉は既に撈ぎ取られて一枚の戸は片足を踏み外した人の様にかたりと斜に居た。其處に無数の人の頭と背中が揉み合つて居た。其の混雜の波の上に建物の白く見える、鐵網の近くには背後から押し來る人を背中で押し返しながら支拂口頼みまつせ」何してんのや」など、徐々惡罵の下地を現はし掛けてる者があつた。

貯めた金を取戻さんがために一日の暇を潰してやつて来るのだと思へば五郎も流石に同情に堪へなかつた。

東の方の入口へ廻つて見ると此處は一段と喧囂を極めて居た。支拂口へは此の入口から廊下を廻らなければならぬ、廊下は既に人の頭で塞がつて居る、外にあるものは其れを知らないの遠慮もなく押し寄せて来る。石段の上には二三十人の人が内から押し返すのと外から押されるのと両方が壓迫に堪へ兼ねて聲を限りに怒鳴つて居た。巡查が其の間を怒鳴りながら制して居たが其れは何の役にも立たなかつた。

「退いておくなはれ」と女の悲鳴が聞える。

「鮮詰になりまんが」と男の聲が聞える。其中にも一人の巡查が今一人の巡查の肩の上へ乗つて群集を制したが直ぐ人波に揉まれて落ちたので群集はわつと喝采した。

「是は只事でない」と五郎は群集を押分け、庶務課の方へ路を取つた。其處に七八人の人々が遠巻に扉口を指して何やら罵つて居た。五郎は直に其處から入つた。銀行の内部は恰ら火事場の如くであつた、机の上の凡てのものが形付けられて絨氈なども剥ぎ取たまゝ、積み重ねてあつ

た。凡ての銀行員は室の所々に額を鳩めて不安さうな眼をして小聲に語つては支拂口の動搖めに耳を敏てた。此の騒ぎの中にも殆んど無關係の人の如く小使が如露を持って床板に水を撒いて居た。

「御父様は？」と五郎は小使に訊ねた。

「重役室だつしやろ」

五郎は重役室へ足を返した。室の扉は開かれてあつた。五郎は直に父の姿を見た。父は中央の安樂椅子に腰を掛けて脊廣を着た太い腹を兩手で抱へる様にして卓子を見詰めて居た。其の左右には重役の人々が居並んだ。何れも沈黙して不安と興奮の境にあるもの、如く又互ひに誰かの發言を待つもの、如くであつた。五郎の入つた時一同の眼は其れに向いた。

「五郎か、どうして來た」と父は五郎を見るや否や聲を掛けた。

「少し用事がありましたので」と五郎は成るべく明快に言つた。

「爾か」

父は簡單に言つて又沈黙した。併し父の顔には一點の曇もなかつた。其の不屈不撓の氣概と

精悍の氣が溢れて居た。五郎は何となく頼母しさを感ずると共に此の沈着な態度は寧ろ必死の覺悟であるまいかと思つた。

「大變な騒ぎですね」と五郎は言つた。

「うむ、世間に對して濟まない事をした」と父は言つた。此の時外の騒々しさが嵐の如く聞えた。

「私は思ふに、此塵に急激に取付騒が起つたのは何か他に理由があると思ひます」と重役の一人が言つた。

「理由はいろいろあるでせうが歸する處は私の責任です」

突然扉口に一人の姿が現はれた。其れは六藏の父の石尾傳八であつた。眞白な白髪が汗に濡れて瘦せた黴深い顔は憤怒に満ちて居た。

「社長さん。奥田が未だ見えないでせう」と彼は言つた。

「あ、未だ見えない、先刻から電話を掛けてるんだが」

「見えない筈です。彼奴は裏切をしました」

「裏切？」

「會社の秘密を通信社に書かせたのは彼奴です」

「そんな事があるものか」と隆二は直に打消した。

「いや確かに彼奴で、彼奴は自分の持株を賣りに掛つたのです。それが今日の騒の原因です」

「そんな事はない。奥田に限つて其那事はない。奥田は私の片腕だ。私は奥田を信ずる」

「併し社長さん」

「悪口は言つてくれるな」と隆二は吐く様に言つた。傳八は長い溜息をして椅子に凭れ

「第一番に馳せ参すべき筈の奥田喜平が影も形も見せぬのは如何にも怪しむべき心つた。併し隆二は固く奥田を信じて居る空堀のブローカーから今日屈指の凡て隆二の庇蔭である事は何人も知つてゐる事實で、隆二の股肱とい

奥田と數ふる、其れだけの深い因縁のある奥田が裏切しやうとは什麼して思へ世間の定評に依ると隆二は親分肌である。人に頼まれた事は否と言つた事とする念が強くて一度信じた者は如何なる事があつても捨てない此故に此の部水火も辭せぬが、其の代りに敵が多い。凡て正義の信念の強い人は他人が虚憎む念が非常に強い、其れだけ世間に敵を作る事になる。

奥田の裏切は傳八が確乎たる證據を握つたのであつたが、其れを説明する前に隆二が一言の下に排斥した。人々は互に顔を見合はせた。此の時表の騒ぎが益々烈しくなつた。「什麼かなりますまいか」と巡查が驅け込んで來て言つた。「私が什麼にかしませう」

隆二は起て室を出た。一同之に従いた。父の身上に異變があつてはと五郎は直ぐに父と並んだ。隆二は直ぐに群集の渦巻の中に突進した。

「大島だ」と人々は鳴を静めた。而してどつと外へ雪崩た。

「皆さん」と隆二は扉口に起て極めて叮嚀に挨拶した。「私は當銀行の頭取大島隆二です今朝の

新聞紙の破綻云々と記載しあつたために皆さんが御不安を抱いて御出なされたのは如何にも御道理に存じます併し當銀行は決して破綻に近づいて居りません。今朝から既に十七萬圓餘の預金を仕拂ひ致しました。其れ以上の金は今銀行にありません。其れは明日になりますと日本銀行から持て參る事になつて居ります。御不安に思はる、方は明朝御出になれば必ず支拂申します。今日は現金を支拂ひ盡しましたから左様御承知を願ひます。大島隆二は決して皆さんを欺く様な事は致しません」

「ほんまだつか」と群集の一人が叫んだ。

「もう可い／＼解つた／＼」と五六人が叫んだ。

「さい」と隆二は言つた。

誰か言つた。而して渦巻く群集は一種のどよめきを起して右へ左へぞろ／＼と銀行員はほつと呼吸を吐いた。如何なる修羅の蒼が現出するだらうと恐れて平凡に落着した。

「と五郎は思つた。」

「さん」と彼は廊下で父に言った。「銀行は大丈夫なんですか」
「お前は心配せんでも可いよ」と父は決然と言つて「併し……」と何やら考へ「もう二三日滞在してくれ」

「はい、御用がありますなら何時までも……」

「うむ、よし、よし」

父は気軽に足を運んだ。そして頭取室へ入るや否やぐつたりと寢椅子に寝轉んで天井を見詰めた。

「矢張り心配なのだ」と五郎は思つた。明日になつたら什麼な事が起るだらう。父にも其の成案がないのだ。

「憚う考へてる處へ慌たしく走つて来たものがある。其れは六藏であつた。」

「五郎さん、僕は貴方を探して居ました」と彼は言つた。

「何か用か、君」

「重大な事件で」と六藏は眞黒な顔から眼ばかりを光らして言つた。

平素物に慌てた事のない六藏が呼吸せき込んで来た處を見ると重大な事件に相違ないと五郎は思つた。

「どんな事か」

「此方へ」と六藏は廊下の隅に五郎を曳いて「僕は奥田を殺しに行きますから父の事は御願します」

「憚ういふ聲は顔へて居た。」

「どうしたんだ君」と五郎は宥める様に言つた。

「奥田は銀行の祕密を通信社の穴戸といふ男に全然話して居ました。穴戸は其れを發表すると言つて居ました。」

「本當か君」

「本當です。僕は父に命令られて奥田の後を跟けてるんです。繩家といふ料理屋で二人が話し

てるのを聞いたのです。宍戸は其れを明日發表するさうです。其れと同時に奥田は社長の關係して凡ての會社の持株を賣りに掛る計畫なんです。淀川銀行の此の騒のある矢先に社長の片腕と稱せられて居る奥田が株を賣り出したらもう一堪りもなく會社が減んでしまふのです。「悪い奴だなあ、父は奥田を飽くまでも信じてるんだぜ」

「社長は餘りに人を信じ過ると私の父が口惜しがつて居ます。併し僕は彼等の計畫を破壊して來ましたから二三日は大丈夫です」

「どういふ手段で？」

「僕は宍戸を撲りました。麥酒の壘で後頭部を、つんと打つたら眼を廻して倒れたから、口が利けぬ様に口の中に熱湯を注ぎ込んで、筆が取れない様に右の指を二本ばきく折つて來ました」

「亂暴だね」

「亂暴かも知れませんが、仕方がありません」

「して奥田は？」

「直逃げました。生かして置くと不可いから今日中に殺してしまふ積です」

「君、とんでもない事だ。そんな事したら君は什麼すると思ふ」

「僕も死んでしまへば其れで可いのです」

「では御父さんをどうする」

父の事を言はれて六藏は急に首垂れて、眼に涙を浮かべ「どうか宜しく頼みます。待つてくれ給へ」と五郎は霎時考へて「君の厚意は謝する、併し奥田を殺すの今日の一日だけ待つてくれ給へ、僕に考へがあるから」

「ぐづくして居る場合ではありません」

「それは解つてるよ。僕は先づ奥田を説得する、祕密を許かない様に、株を賣ら」

「それは無駄です」

「無駄でない、僕に成算がある」

「若しそれが出来なかつたら？」

「その時こそは君に奥田を殺して貰ふまでもなく僕が殺してしまはう」

「いや僕に殺さして下さい。よろしい、では今日一日だけ御待ちします、其の代りに明日になつたら僕は奥田を殺しますよ」

「可し、解つた」

五郎は六藏に別れて獨り入口に立つた。六藏の暴行を制めるために今日中に奥田を説得すると言つたもの、恩義を忘れた人間に道理を説いた處で何の甲斐があらう、併し銀行破綻の張本人が奥田であるとすれば、差向き奥田を説くより他に方法がない。彼は慙う決心して車に乗つた。

奥田の家は清水町にある。彼は巨萬の富を有しながら濫塗格子の小さな家に住んで居る。内を乞ふと女中とも付かず妾とも付かぬ首白粉の女が出て來た。

「御主人は？」

「名古屋へ參りました」

名古屋へ行つたと聞いて五郎は落膽した。父の運命は今旦夕に迫つて居る。どうせ女の言葉は虚偽に違ひないが、左りとて此の上に追究する事も出来ぬ。

茫然電車路に沿うて歩き、夢の如く角を曲り又曲つて又續ける。不圖氣が付くと彼は何時の間にか心齋橋筋に來て居た。

「これは什麼した事だらう」

足を踏み返さうとする途端に彼は一人の若い紳士が白銀の時計を掌に載せて其れを見ながら歩いて居るのが眼に付いた。

「おう、奥田の倅の富男だ」と彼は思った。指に寶石の指環を二つも箝めて、綺麗に油を塗つた髪の毛が帽子を漏れて其白い額に垂れて居る。五郎は唾を吐きかけた様な氣持で顔を反らして通り過ぎたが、彼の頭に閃いたものがらう。

「非常の場合だ、此の男に頭を下けて頼

彼は直ぐ決心した。而して足を返して

「やあ富男さん」

「知れない」

聲を掛けられた富男はふいと顔を舉げて五郎を見た。ら婦人持らしい柄眼鏡を出し、其れを眼に當て、「あ、五郎、したね」

しく眼を細めて衣匣か

「爾です」

「何か御用ですかね」

「少し御話をしたいんですが」

「はあ御話し……なるほど……私は」と藏ひかけた時計をもう一度出して見て「約束がありません」

「ほんの十分間位で可いです」

「此處で伺へませんか」

「往來ですからな」

「いかにも、併し私は實際忙がしいんですからな。英國と佛蘭西で戦争のために未亡人が澤山に出来る。そこで此の未亡人に配すべき第二の良人を何れの國から輸入すべきやに就ては英佛人の苦心して居る處なんです。其處で私は右未亡人を米國にある日本の移民地へ差向けるが最

も至當であるといふ意見を有ちまして、其れを外務大臣に建議しました處、大臣は特に秘書官を大阪へ向けて私の意見を精しく聞きたいといふので、今日會見の約束になつて居るのです。大臣なんてものは案外智慧がないものですな」

「其のお話は何れ緩くり聞きませう。兎も角僕は急ぐんですから」

「いかにも〜」と富男は首肯いて眼鏡をポケットに入れ「では私の宿房に参りませう」

「宿房とは何ですか」

「宿房を御存じない？」と富男は不思議さうにして「富田屋へ御案内致しませうか」

「遊廓は困ります」

「遊廓ではありませんよ、では第二の宿房にしませうか但しは第三の」

「第五でも第百でも構ひません」

「貴方は頑固ですな、では第三の處にしませう」

富男は歩き出した。橋の前を左に折れると幾十軒となき御茶屋が並んで居る。富男は其の中の一軒に入った。

「被居やりまし」と仲居が出迎へる。

「御客様を伴れて来ましたからね、どうか綺麗な處を二三人大急ぎでな。多分今頃は風呂に入つてるかも知らんが、なにね、大阪の女は首から掛けて下唇の處まで白粉を塗るから手間が取れる、平常のまゝで可い、御客様が堅い人だからな、座敷へ来るなり直に役者の噂をしたり連鎖劇の筋を話したりする様な低級な奴は止めて貰ひたい。悪い癖だ、大阪の藝者はお客を除外にして自分勝手の御饒舌を戦はして居る、爾いふ連中の相手になるには御客の方で精々馬鹿になつて宅の女中に對するよりも調子を下ろして掛らなければならん。尤も低級な御客にばかり接して居るから藝者の無智は當り前かも知らんよ」

二一

好き勝手な事ばかり饒舌り續けて富男は座敷の食卓の前に足を投げ出した。

「突然ですが、話といふのは」と五郎に向ひ合つて坐りながら言ひ出した。

「まあ、急かんでも可いですよ。ゆつくり伺ひませう。どうです此の床の間の掛軸はものにな

つて居ませんな。尤も油繪よりか増ですよ、油繪といふ奴はごちやく／＼反吐を堅めた様で美術になつて居ません。西洋へ行つて見ると矢張り日本畫が可いですな。まあ其那に改まらすとお崩しなさい。どうも日本では疊の上に乗るなんて實に悪い習慣ですよ。おい／＼藝者は未だか」

「いや僕は直に歸るんですが」

「まあ可いさ、今に藝者が来ますよ。尤も大阪の藝者は低能ですが、東京ほど御粗末なのはありません。どうです君も東京では大分其の方で發展しますか」

「僕は一向暗いです。ですが僕の御願といふのは」

「やあ綺麗々々、磨き立てを拜見するの光榮を有して感謝に堪へませんな」と富男は透さす言つた。

「うまい事を言やはるわ」と藝者は嫣然して裾をばつと開き食卓の横に坐つて「今日は」と五郎に挨拶する。五郎は慌て、膝を組み直した。

「昨夜あれから什麼した」

「六甲へ行きました」

「御樂みだね」

「御苦みやわ、奇體な御客様だつせ、宿屋へ泊るとな、宿屋は室代と蒲團代と御湯錢を取るんだつしやろ、其れを御客様が怒りやはつてな、宿屋が蒲團代を取るといふ法があるもんかてな」

「一晩中寢ずに騒ぎはりましたんね」

「蒲團代が惜いので寢なかつたんだね。其奴あ奇抜だ、併し宿屋の規則もよろしくないな」

「ものが高價いさかいにな」

五郎はもち／＼して面白くもない話を聞きながら、話の途切れるのを待つて居ると、臆て豆と酒が出る。

「さあ一杯」と富男は杯を差した。

「いや僕は」

「お飲りやす」と藝者は銚子を取つて酌いだ。而して富男に向ひ「貴方は麥酒だつか」

「どつちでも可い」

「御免やす」

藝者は杯洗のから盃を出して肘長く袖口を巻つて、袂の先を口に啣へた。

「君、一つ行きませう」と富男は盃を飲み干して五郎に差す。

「實は少し用談があるので」と五郎は盃を取りながら言ひ出した。

「何だんね、用談は後廻しにしなければ」

「其れは出来ないんだ」と五郎は勇氣を呼び起して「奥田さん僕の御願だが、雲時藝者を別席さしてくれませんか」

「私、彼方へ行ってまつさ」と藝者は立ちかけた。

「いや宜しい、行かんでも可いよ。五郎さん此の女は氣が置ける女でないから構はんよ」

何なら私が媒介しても可い。どうだい里香取持つてあげやうか」

「どうぞ」と里香は嫣然して氣の毒さうに五郎を見やり「私遠慮しまへ」

「構はん」と五郎は決然と顔を上げて「奥田さん、僕の父を助けて下さる」

「君の御父さんを？」と富男は故意と驚いた様に言つた時、里香はふいと室を出た。
 「爾です、父は御承知の如く危急存亡の場合に臨んで居ます。これを救ひ得るのは君の御父さんの力にあるのです」

「どうして私の父が其那に必要なのです、君の御父様は大阪第一の商業家ぢやありませんか、私の父なんか其の一乾兒に過ぎないんです」

「いや其れは恠ういふ理由です。御尊父は今淀川銀行の關係して居る諸會社の株を捨賣にしようとして居るのです。重役が持株を賣り出せば信用が地に落ちるのは當り前です。どうか君の力で御尊父を思ひ止まらして貰ひたいのです。其れでないと銀行は破産します。父は再び實業界へ立つ事が出来なくなります」

「あ、爾ですか」と富男は冷やかに、「併し私の父は、商人ですから、金儲けをする事に就ては多少の情實は顧みないかも知れませんよ。株を賣るの買ふのと言た處で父の自由ですから私と



して其父の意思を枉げさせるといふ事は一寸苦しい譯ですが」

「其れです、其れだから御願するので、御尊父は商人ではありませんが、御尊父と僕の父との關係は中々一朝一夕のものでない事は君も御承知でせう」

「其れはねえ君、私の父と君の御尊父との間柄の事で私達の知つた事ではないのだから、當人同士の相談に仕たらどうですか、お互に富豪の家に生れたんだ、親の金をどしどし費へば其れで「たる義務が済むといふものだ爾だらうまあ大いに飲まう。おい藝者は何處へ

行つた」

「待つてくれたまへ」と五郎は手を以て制めて、

「金は金、情誼は情誼、恠う區別するのは當然かも知らんが、世間ではお互の親同士の關係をそんなに軽々しく見て居ません。併し僕は今此で僕の父が如何に御尊父を引立てたかなどいふ事は止めやう。若し株を賣る事が止め得ないとすれば更に一つの御願がある。其れは明日の新聞に僕の父の祕密を託き立てるべく通信社から通信を出したさうだが、而して其れを揉み消すのは君と御尊父の手でなければ出来ぬといふ事を聞いたのだが、どうか其の勞を取つて下さるまいか」

「新聞記事の揉消？そんな事は私には出来ません」と富男は慌てた様に言うて例のプラチナの時計を出して見た。

「確かに君の手で出来るといふ事だが、奥田君、僕の父は御承知の通りの人間だ。君の一家に對しても多少盡す處があつたとすれば此際一臂の力を貸してくれても可いぢやないか」

「どうも困りますな」と富男は笑つて「御事情はいかにも御察し申すが、私共に出来ない事は

どうも仕方がありませんよ」

「どうしても不可せんか」と五郎は額の汗を拳で拭いて顔を上げた。

「どうもね」と富男は横を向く、

「奥田君、此の通りだ。僕の一生の御願だ」

五郎は兩手を疊に突いて頭を下けた。富男は冷然と盃を嘗めながら其れを見やつて居たが、
て恠う言つた。

「よろしい、では私が父を説得して見やう」

「やつてくれますか」

「あ、やらう。併しねえ君、其れに就ては私からも君に御願がある」

「どんな事でも僕は辭しません。僕は死んでも可いのです。父の危難さへ遁れられ、ば」

「よし」と富男は勿體らしく首肯して、

「君の御令妹を私の妻に迎へたいのです」

「妹を妻に？」と五郎は吃驚して富男の顔を見た。

「爾です、五郎君、私は敢て御宅の災難に乗じて無理を言ふものではありません。此の事は既に君も御存知の事だと思つて居ます。兎に角ね、淀川銀行の浮沈に關する事で又御尊父の死活に關する重大な問題を安全に解決するには中々容易な事ではないのです。御説の通り私の父が其の死活の權を握つてるかも知りませんが若し爾とすれば父は君の一家を救ふには多大の犠牲を拂はなければならぬのですね。だが犠牲といふ奴は口には言へるが實行が出来にくいもので單に事業上の御交際位では決心が出来かねるものです。そこで私は慙う考へるのですよ。君の御宅と私の宅と特別の懇親な間柄になるのです。つまり親類ですな、御令妹が私の妻になつて下されば君は私の兄さんで御尊父は私の父ですからね、どんな犠牲でも拂つて御宅の難儀を救はなければなりません。至極簡單な方法はこれだけです。私が父に説くとしても慙ういふ條件があるからと言へば父は屹度承諾するでせう。いや是非承諾させます。父が何と言つても私が

引受けます。どうです五郎さん」

五郎は返答に困つて肩を揺かして呼吸を吐いた。

「どうですか」と富男は繰返した。

「さあ」

「君、これが君の父の死活に關する場合なんだよ。私は強て君に御願するのではないのだが此の條件がなければ父が承諾しまいと思ふからですよ。私にした處で何も好き好んで多大の犠牲を拂ふに當らない話だけれども其處は人情の然らしむる處で、君に對する同情と御令妹に對する戀との二つのものがあるからですよ。御令妹にした處が左まで私を嫌つてる譯でもありませんまいし、私も御令妹の良人として見劣りする様な男でない位の信は有つて居る積です。さうですか」

斯る場合に斯る難題を持ち出すとは餘りに卑劣な男だ。慙ういふ男に一人の妹を犠牲にする事が果して忍び得る事であらうか。五郎は凝と沈思に沈んだ。

「ねえ君、私だつて萬更捨てた男ぢやないんだ。私の妻になると御令妹は屹度幸福になる。」

あ、屹度爾だよ。今の若い紳士連には實際私の右に出るものはないんだからね。
富男は平顔の鼻が低く、ちよんぼりした口髭揃んで、酒が大分廻つたらしく卑しけな細い眼
をとろりとさせて鼻から呼吸を吐く。五郎は猶も考へた。肚の底から張り倒してやれといふ聲
が渦巻いて居ると、他の一方では、

「父のためだ」と注意する聲が聞える。

「御尊父にしてもだ、私の様な婚を持てばまあ不足はない筈だよ。君も私の兄さんになれば従
つて肩身も廣しさね、どこでも會社に御周旋が出来よ、どうだね君」

「僕は厭だ」と五郎は突然言つた。

「なに？厭か」

「厭だ」

「なぜ？」

「僕は妹を賣買するのは厭だ」

「賣買とは？」

「妹は君を嫌つて居る、嫌ひなもの、處へ行けといふのは妹を藝者に賣ると同じぢやないか」
「其れではお話にならない。君の一家が減るぜ」
「減んでも仕方がない。卑劣な事をして災難を逃れるよりか寧ろ男らしく減る方が可い。其
れが大島家の家法だよ」

五郎は昂然として言つた。

二四

五郎の憤激に對して富男は冷やかに笑つた。

「其れでは君、何のために私に相談をするんですか」

「君は恩義を知つて居たらうと思つて居たからだ。君も君の父も犬畜生でない限りは僕の父の
恩に依つて今日聊か世間に認められる様になつた位の事は知つてる筈だ。其れを知つてるなら
銀行の秘密を許き株を賣り、利慾のために父を陥れたり其の弱味に乗じて結婚を要求したり
する様な事はなすまじき筈だ」

「其れなら君は何も此處へ來なくとも可いわけだね。まあ自然に任せるさ。淀川銀行は破産する、會社は潰れる、背任罪で拘引される其れで可からう」

「可しツ。君の様なものにはものを言ふだけ口の汚れだ」

五郎は其の儘室を飛出した。外へ出ると午後の日が町に漲つて居た。彼は霎時眼を閉ぢて頭のぐらくするのを静めた。而して歩き出した。

「何も彼も駄目になつた。此の上は潔く滅亡を待たう。卑劣な屈辱に甘んずるよりは討死するに及かずだ。慙うなつて來ると第一に父に此の事を勧めなければならん」

彼は直ぐに銀行に行つた。父は外へ行たまゝ歸らなかつた。銀行では鼎の湧くが如く沸騰して居た。

「やつたく、痛快だね」と一人が言ふ。

其れは六藏に關する噂であつた。六藏は奥田喜平の宅へ暴れ込んだ。而して喜平の兩手を縛りあげて肩に擔いで銀行の門の前まで來たが、群集に紛れて喜平が逃けてしまつたのであつた。六藏は直ぐ警察へ拘引せられた。此の噂を聞いて五郎は警察署へ行かうと思つた。併し其の前

に是非父に會はねばならぬ。彼れは凡ての人々に父の行先を訊ねた。何人も知つてるものがない。重役室へ入ると六藏の父の傳八が獨り卓子に向つて帳簿を調べて居た。彼の頭は雪の如く白い首筋は瘦せて喉の骨が際立て高く見える。大きな老眼鏡を掛けて充血した眼を帳簿に向け凝と考へては溜息を吐く、彼は我が子の六藏が奥田に暴行を加へて拘引された事も知つて居る。併し彼の頭は如何にして主人の危急を救はうかに熱して居る。

「石尾さん」と五郎は聲を掛けた。

「おう坊ちゃん」と傳八は眼鏡を外して此方を見向き「御父様に御會ひでしたか」

「いや、僕が今探してるんです」

「あ、左様か、御父様も貴方を探して御出でしたよ」

「何處へ行つたでせう」

「では多分箕面でせう、是非貴方に會ひたいと仰有てゐましたから」

「急用なんでせうか」

「爾ですよ」と傳八は霎時五郎を見詰めたが涙をほとりくと卓子の上に落した。

「坊ちゃん、様はどうしても裁判所へ行かなければなりませんまい」

「裁判所」

「豫審の方へ……」
五郎は全身に氷の刃を徹された様な気がした。

「どうしても？」

「はい、御父様もその御覚悟ですよ、では是非貴方に御話があるとか仰有つて」
「僕は行って見ませう」

五郎は直ぐ室を出やうとして立寄り「石尾さん、六藏君が何かやつたさうですね」
「あ、六藏ですか」と傳八は帳簿の方を向いて「あれはあれの信する處をやるのですから私は決して制めない積です」

二五

五郎は銀行を出た。いろ／＼な問題が彼の頭の底に渦巻いて終には疲勞と困憊から只だ茫然

と意識を失ふのであつた。萬事既に休せりである。銀行も會社も破産して父は再び實業界に立つ事が出来なくなる。彼は憊う思つて町を歩いた。夕方の町は賑やかである。西の空は眞紅な雲が光を放つて其れを抹した様な薄紫の色が屋根々々の上を謎の様に染めて居た。高い建物の窓の硝子がきら／＼と光つて居ると其の下に起伏する高低の臺が少しづつ、明るい色から暗い色に沈みつゝ、行く。

「此の建物の多くは銀行だ、會社だ、商館だ、此等の殆んど凡てが父の庇護を受けて居たのだ。彼等は平氣で安らかで半空に屋根を突出して居る彼等を生み出した父は今落日の如く沈んで居る。父が沈まうと滅ばうと彼等は痛くも痒くもない。而して彼等は寧ろ父の滅亡を矢して居るのだ」
五郎の若い血は憤怒に燃えた。

父の身になつたら什麼に口惜しいだらう」
「い而して髭の濃い父の男らしい顔が歴々と眼に浮ぶ、で彼は路を急いだ。
双れて何も考へる事が出来なくなつた。箕面で降りて眞直に家を指して急ぐ

門の中には車夫が水を撒いて居た。

「御父さんは？」

「御待ちして居ましたよ坊ちゃん」

五郎は夢中に家へ飛込んだ。而して自分が父の顔を見たら屹度泣き出すだらうと危ふんだが其の掛念は直に消えた。母の室から父の笑聲が洩れたのである。

「只今」と五郎は室へ入るや否や父の顔を見ずに言った。

「おう五郎か、待て居たよ」と父は元氣能く言った。母は蒲團を捲くつて機嫌よく座蒲團の上に乗つて居た。肥つた身體にも病後の衰へが見えて、其れでも帶をきちんと結んで居た。

「御父様が見えたので、強て勤めてるんだ」と五郎は思つた。而して晶子の方を見やつた。晶子は嫣然して兄を見返して又父の顔を見た。其れは何だか慙う父に冗談でも言ひたい様な風であつた。電燈がにこやかな父と母と妹の顔を照してカステーラが菓子箱の儘、焦色と黄色の和かな光を反射して居る。

「可笑しかつたわ兄さん」と晶子は言った。

「大分賑やかだね」と五郎は久し振で一家團樂の氣分に恍然としながら晶子の話を聞かぬ中から笑ひかけた。

「あのね、今ね、御父様と御母様と御結婚の時の話を伺つたのよ。御父様はね、御母様に前年の年は幾歳だと聞いたのが初めての對話だつたのですつて」

「慙う言ひかけて晶子は堪まらなさうに笑つた。五郎も笑つた。松子も笑つた。父も笑つた。」

「御母さんでも花嫁の時代があつたのですかなあ」と五郎は不思議さうに言った。此の靄然たる和氣の中にも何となく不安の色が無いでもなかつた、だが人々は強て其れを思ふまいとするかの如く見えた。而して笑ひの中に食卓に着いた。父は瑪瑙色の洋盃で葡萄酒を飲んだ。

「お前も飲らんか」と彼は松子に言つた。少し位は可いよ」

「はい戴きませう」と松子は快よく飲む終つて父に返した。而して二人は顔を見合せた時、父

た。彼は涙が胸に満ちて顔を擧げる事が出来なかつた。

「晶さん、お前も」

「えい、戴きますわ」

「慙う言つた時晶子は思はずほろりと涙を零した。」

二六

晶子の涙は悲劇開幕の鈴であつた。父は晶子の盃を受取つて最後に今一盃を傾けた。而して三人を平等に見廻した。

「私はお前達に言ふ事がある」と彼は確乎とした聲で言つた。

「解つて居ます御父さん」と五郎は若々しい聲で答へた。「併し御母さんが病後ですから、何れ又」

「いや」と父は頭を掉して微笑した。「御母さんはお前達よりも確乎してるぞ」

松子は微笑して良人の顔を見上げた。其れは如何にも我を知るものは良人であると言ひたけであつた。

「御免なさい御母さん、僕はお御母さんを侮つたわけではありません」と五郎は頭を低れた。「い、えね、心配なさらんでも可いんですよ。浮き沈みは時の拍子ですからね」と松子は氣輕に言つた。

「私は破産をするのだ」と父は言つた。三人は等しく頭を下けた。

「私はもう再び起つ事は出来まい。此の邸宅も什器もお前達の敷いてる座蒲團までが私のものでなくなるのだ」

「其那ものはなくなつたて可いわ、私達は御母さんやお父さんと慙うして睦じく暮し居ればどんなに貧乏人になつたつて構ひませんわ」と晶子は眼を瞬きながら昂奮した様に言つた。

「うむ、能く言つてくれた。だが私はお前達とも慙うして楽しく暮す事が出来ないんだ」

「何故ですか」と五郎は言つた。

「私は監獄へ行かなきゃならん」

「監獄へ？」と晶子は吃驚して「御父さんに何んの罪があるの？」

「罪？」と隆二は問ひ返す様に間を措て「罪といふものは自分で決めるものと他人が決めるも

のと二種類がある私が罪と思はなくても法律が之を罪とすれば止むを得ない事だ。併し私は決して天地に對して愧づる處はない。有益な事業に投資して國家の富源を増殖するのは銀行の目的である。信じて居る。然るに日本の銀行は之と反對である。無益な事業でも但しは放蕩酒色のための費用でも、抵當物さへあれば金を貸してやる。銀行は金貸をして金利を謀るのが目的なつて居る。これが私が世間に容れない一原因だ。此の點に於て私は決して私の主義が誤つて居ないと信じて居るのだ。私には斷じて罪がない」

「無論です」と五郎は眼を輝かして言つた。

「僕も信じます」

「だが、私に過失がある」と隆二は力強い聲で言つた。過失は過失である。其れは決して罪惡ではない。然るに法律は過失と罪惡を混同するのだ。可いか、御父さんが惡かつたらお前達は遠慮なく責めてくれ。惡くないと思ふなら、御父さんのために落魄するお前達の運命を悲觀するな。可いか、私の過失といふのは猥りに人を信用した事だ。銀行の事でも會社の事でも私は重役に一任して居た。其れが私の過失である。私は味方を信ずる、私の味方は私と同じく正し

い人間だと思つて居る。私は好んで人の世話をする、後進を引立てる。私は人の恩を知つて居る。聊かの恩惠でも受ける事があれば、私は必ず是に報ゆるに全力を盡くすのだ。私自身の性格が其れであるから、他人も必ず爾だらうと信じて居た。私の恩を受けた者は私の腹心であると信じて居た。然るに彼等は爾でなかつた。彼等は私を利用するために私の乾兒となつて居たに過ぎない。彼等は私の信用に乗じて出来る限り自己の懐を肥やすべく働いた。甚だしきは銀行の遺縁法と稱して假定の人間を作つて其れを預金主としたり株主としたりした者がある。其等の不正行爲を取締る事が出来なかつたのは私の過失だ。此の過失は責任上法律の面に於て私の罪となる、其れだけだ。法律は事情を問はない。私の罪は明白である」

隆二は怒う言つて三人を見廻しながら呼吸を吐いた。

「どんな事がありましたも御父様に罪があるとは思へません」と松子は淨かに言つた。

「人を信じ過ぎたのは私の罪だ」と隆二は言つた。

「其れは美しい罪です。尊い罪です。人を疑ひつ、無事であるよりも人間としてどれだけ價值があるか比較になりません」と五郎は言つた。

「だが考へて見ると實業家なるものは元とく、私利私慾を主眼として居る者だ。恩義や道徳や信任などが彼等の前には不渡手形よりも劣つて見えるだらう」

隆二は霎時口を閉ぢて更に洋盃を飲み干したが、臆て嚴かに言ひ出した。

「そこで五郎、晶子、私はお前達二人に私の秘密を打明けなきやならん」

二七

「秘密!と聞て二人は眼を擧げて父の顔を睥めた。父は端然として兩手を食卓の上に置き、

「言ふまいと思つたが、言はずには置かれぬ。今度監獄へ行くと何時又會へるか解らないか

ら」

「憚ういふ父の聲は段々に顫へ出した。彼は一寸眼を閉ぢて又開いた。

「五郎、晶子、お前達は今まで私を御父さんだと思つて能く私の言ふ事を肯いてくれた。眞實

の親子でもお前達と私夫婦の様に睦まじいものは世間はないのだ。だが私は何時までもお前達を偽つて居る事は出来ない。五郎、晶子、お前達は私の眞實の子ではないのだ」

「御父様!」と五郎は仰天して父を見詰めた。彼の驚きは絶頂に達した。彼は一瞬時に其れは偽りでなからうかと思つた。と又父の嚴肅な態度に打たれて眞實であらうと思ひ直した。兎もあれ彼は殆んど夢の様に判断の力さへなかつた。

「それは本當ですか」

「本當だ、お前達は私の血を分けた子ではないのだ。なあ晶子お前は女だから憚う言ふと悲しからう。併しお父さんの娘で居るとお前は懲役人の娘と稱はれなきやならん。お前は潔い身體だ。私も男としてお前達を懲役人の子としたくない。可いか、解つたか。お前は今日限りお前の父の許へ復らなきやならん。而して幸福に暮してくれ。可いか、お前の實の御父様は楠侯爵だ」

「知て居ますわ〜」と晶子は泣聲になつて言た。「御父様、私知て居ますわ」

「何?知てる?」

「えい知て居ますわ、だけれどもねえ御父様、私は侯爵の子になりたくありません。私には親といふのは御父様と御母様より外にありませんわ。御父様は私に肩身が狭ひ思ひをさせまいと

して侯爵へ復さうとなさるのでせうが、私は何處へも行きたくありません。懲役人の娘でも私は大島隆二の娘だと言はれる方が可いんです。御父様が監獄へ被行つたからつて私は此の家を出て行かれると思つて被居るんですか。私を其那女だと思つて被居るんですか。御父さんのお留守中には御母さんがあります。私はお母さんと二人で御父さんの御無事で出て被來やるのを御待ちして居ますわ。もうくそんな情ない事を仰有つて下さいませ。ねえ御父さん、私は御父さんの子です。私は御父さんの子です。私は御父さんの……」

晶子の眼から涙が瀧の如く落ちて食卓の上にはほとくと滴つた。彼女は濡れた顔を其儘に父に向けて恨むが如く父を見上げた。隆二は黙つて眼を瞬いた。母は聲を擧げて泣いた。

「晶さん、能く言つてくれた」と五郎も涙を拳骨で拭き乍ら言つた。「御父さん、僕は全然夢の様です。晶さんが侯爵の子であるといふ事を今初めて聞きました。其れは事實か什麼か知りませんが、僕が御父さんの子でないといふ事は什麼しても信する事が出来ません。御父様は僕の前途を思つて父子の縁を絶たうとなさるのではありませんか。僕は御父さんの子です。僕は御父さんの子たる事を無上の光榮として居るのです假令御父さんがどんな刑を受けやうとも僕は

公然として御父さんの子たる事を矜恃とします」

「いや其れは不可、私だつて御前達の様な潔白な子供の親となつて居る事がどれだけ幸福か知れない。併し私は親として親らしい義務を果す事が出来ないのだ。人の子を託されて其れを幸福にする事が出来ずに却つて肩身の狭い人間にするといふのは男として耻づべき事だ。考へて見ると人の子を我が子と偽り終生眞實の親を知らしめざるのは人道の上に於て正しからざる事だ。五郎、此で別れても御前と私とは愛情の上に於て親子だぞ。可いか、だが肉體の上に於て私はお前をお前の親に復す、お前の父といふのは日本人ではないのだ」

「えつ？」

「父は韓國人だ、本名は解らぬ、住所も解らん、日本での偽名は秋田権六郎と言つて居る」

「懲う言つて父は懐から一通の手紙を出した。」

「これはお前を兩國の岸から拾ひ上げた翌日私の處へよこした手紙だ」

「僕は朝鮮人だ」

五郎は顔色土の如くなつた松子も晶子も餘りの驚きに聲さへ出なかつた。

人間驚くべき事は数々ある。併し二十四年間眞實の親だと思つて居た人が親でなく、我が美くしき國土を誇として居たのが自分は朝鮮人だと初めて知る程の驚きが又とあらうか。五郎の驚きと同じく晶子も驚いた。松子も驚いた。而して交りぐに五郎の顔を覗いた。五郎は頭を深く低れたま、黙つて居る。

「あ、是れで私の氣が濟んだ。五郎、お前は成人したら實の父に返さうといふのは私の最初のことであつた。刑餘の父の子であるよりも、潔い人の子である方が可い。お前にして見ると朝鮮人であるといふ事を耻辱と思ふかも知らん。併し其れは決して耻るに及ばん。韓國は既に日本と併合した。祖先が何であらうとお前は立派な日本人だ。どうか父を尋ねて私の心を傳へてくれ、韓國の人民は猶ほ不逞の念を懷いて居るものがある。日本の國風を宣傳して精神的に韓の親密を圖るのはお前の責任だと思つてくれ、私は何の慾もない只お前達二人が幸福になつてくれ、ば可いと思ふだけだ」

隆二は慙う言つたが五郎は未だ何事も言はなかつた。

「其れでは兄さんと私とは兄妹でも何でもありませんね」と晶子は蒼白めた顔を父に向けた。

の上に於ては」と父は言つた。晶子は兩手で顔を蔽ふた。

「す。私死んでも兄さんとは離れません。お父さんとも御母さんとも離れません。ねえ眞方だつて厭でせう」

益々沈黙した。

何とか言つて頂戴よ。私達は御父さんや御母さんの子でなくなつたら什麼しませう。

ん、御願して頂戴。もう一返思ひ返して下さる様に御願して頂戴」

に濡れた顔を摺り寄せて五郎の膝を揺ぶつた。

「らん」と五郎は初めて言つた。

「ぢやないの。兄さん御父さんはね、私達に肩身を狭くさせまいと思つて親子の縁を有るのよ」

「らん」と五郎は再び言つた。

「ん考へて御覽、親子の縁を絶ると言つた處で絶れるものでない。お前と僕と二人が飽くも親だと思つて居れば可いのだ。御父さんが何と仰有らうと僕等の意思を枉げる事が出来ない。だから縁が絶れても絶れなくても同じ事だよ」

「でも兄さん、私達を幸福にしやうと仰有るんですもの」

「勿論僕等は幸福だ。御父さんがどんな罪名を受けやうとも、世間から何と言はれても僕等は御父さんの子である事を一番幸福だと思つてるんだ。だから御父さんの説は成立たんだ。僕は大島五郎でお前は大島晶子であれば可いのだ」

「其れが不可ん」と隆二は溜息と共に言つた。

「預かつたものを親に返すのが至當だ。其れだけだ」

「其れだけですか」と五郎は燃ゆる様な眼を向けた。

「爾だ」

「僕を朝鮮人になれと仰有るんですね。其れが僕の幸福ですか勿論僕は朝鮮人でせう。併し僕

は御父さんより外には父がないと信じて居ます。其れだけ申上げて置きます」

隆二は何も言ふ事が出来なかつた。二人が二人とも慙くまで自分を慕うてるとは思はなかつた。其の心根を察すると流石に張り詰めた氣も弛みさう、彼は額に手を當て、食卓の上に腕を突いた。

二九

一座は沈黙した。庭には蟲の聲が時雨の如く滋く聞えた。と晶子の歎歎きが微に起つた。松子は病後の白い顔を低れて只だ荐りに涙を拭いて居る。

卓子に腕を突いたまゝ、父は眠つた。頭は胡麻鹽に汚れて頃日の疲勞の故か、口を開いたきり顔を少し横に向けて居る。

「お瘠せなすつたわ」と晶子はしみじみと言つて又泣いた。

「御心配をかけては濟まないから兄さん、此の話は彼方で二人で相談しませう」

「ん、爾しやう」

二人が起上つた時隆二はぼつちりと目を開いた。

「待つてくれ、まだ話がある」

二人が可愛さうですから貴方今までの通りにしてやつて下さい」と松子は生體なく泣き崩れて言つた。

「いや／＼」と隆二は頭を掉つて「二人は確かに親子の縁を絶たぞ」と屹と申渡す様に言つた。

「可いか、今日からは他人だ。解つたか」

「其れまで仰有るなら止むを得ません。だが僕等の精神は御父さんやお母さんを親だと思ふだけですよ」

「いや其れも許さん」と隆二は叱る様に言つて急に聲を和らけ「他人となれば私がお前達に相談したい事がある。どうか聞いてくれんか」

「どんな御用でも辭しません。相談と言はずに命令と言つて下さい」と五郎は言つた。

「いや、命令は出来ない、相談だ。時間がないから簡単に済ませよう。五郎、晶子、お前達は私の子でない兄妹でない。どうか二人は夫婦になつてくれんか」

五郎は愕然として眼を睜つたが、晶子がさつと顔を染めて首低れた。

「私の子であれば私の口から言ひにくい。今まで侯爵から二人を結婚させてくれと幾度も言はれたが、お前は韓國人だから私から遠慮して居たのだ。今は遠慮に手間取るべき場合でない。侯爵は五郎を所望してるのだ。二人に異存がなければ、どうか夫婦になつて睦まじく暮してくれ、私は父として言ふのでない他人としての媒介だ。當分お前達を見る事が出来ないから、此の事だけでも決めて行きたい。どうだ五郎」

五郎は眼を眞直に向けて「其の問題は今御父様が災難を受けて被居る最中に決めべき事ではないと思ひます。僕等は僕等の事よりも御父様の事を考へなければならぬ時ですから」

「いや其れが決まると私は安心して行けるんだ」

「其れなら御答へします。晶子は僕の友人高井と結婚さしたいと思つて居たのです」

「其れは晶子も承知の上でか」

「はい承知の上です」

晶子はひよいと顔を上げて何か言はうとしたが口が硬ばり顔が熱して只だ胸が早鉦の如く轟

いた、で彼女は情なき相に母の顔を見やつた。
 「い、え、其れは晶子が好んで決めたものではありません」と松子は言つた。晶子は吻と息を吐いた。

「爾だらう、して見ると堅い契約といふのでもないのだね。兎も角、晶子お前は什麼だ」
 「私ね」と晶子は指先で食卓を擦りながら「私ね、お母さんが御存知ですわ」
 「可しく解つた」と父は初めて微笑しながら「五郎、私の頼みだ。背いてくれ」
 「併し御父さん、僕は友人を欺く事は出来ません」と五郎は苦しうに言つた。
 「其れだけか」

「それだけです」

「晶子は厭でないか」

「僕は大好きです、併し」

「もう可い、解つた」

六 絃 琴

一

破天荒の事件が朝野を驚かした。號外が市中を飛んだ。

「大島隆二が拘引せられた」

大阪からの電話で五郎が淀川銀行へ駆け付けた時には既に父の姿が見えなかつた。而して検事や警官が山なす書類や帳簿を押へて車に積んで居た。重役室には石尾傳八の他誰も居なかつた。傳八は此頃殆ど徹夜續きなので疲れきつた眼を睜つたまゝ、茫然と壁を見詰めて居たが、五郎の入るを見て靜かに咳拂をした。

「大變な事になりましたよ坊ちゃん。併しこれは直き潔白になりますから御心配には及びません」

彼は恚う言つて父の傳言を傳へた。其れは縦令どんな事があつても輕々しく騒ぐべからざる事、五郎も晶子も東京へ行つて學校を勵むべき事、入監中は石尾の他は一切面會に來ては不可い事、世間に對して謹慎の意を表すべき事、終りに父は決して不正を働かないのだから決して人に耻るに及ばぬ事であつた。

「解つた」と五郎は言つた。「併し一遍だけ父に會つて行きたい」
 「其は不可すまい。御父様がくれぐれも仰有つてゐたから」
 「何故だらう」

「坊ちゃん、監獄へ行きますと、何より辛のは女房や子供に面會する事ださうです。決心の鈍るのも其れですからな」
 「仕方がない」と五郎は言つた。

「どうか奥様に御力を付けてあけて下さい御病後ですから」
 五郎は銀行を出ると其處の石段に腰を掛けて六藏が一人兩腕を拱んだまゝ、顔を埋めて居た。
 「六藏君ぢやないか」と五郎は云つた。

「あゝ五郎さん」と六藏は起上りもせず五郎を見上げて「何も彼も駄目ですよ。奥田の奴を殺さうと思つて覗つたけれども」

「もう其那事は止し給へよ」

「五郎さん、僕は什麼したら可いんでせう。何か僕の身體で働く事がありませんか。僕は學問はないが、腕力で出来る事なら何でもやります」

「いや何もやらんでも可いよ。君さあ僕と一緒に歸らう」

「いや僕は歸りません。これから父に相談する事がありますから」

「何の相談だ」

「後で解ります」

「亂暴な事は止せよ、皆なで謹慎しなきやならんのだからね」

六藏は答へず再び顔を兩腕の間に埋めて膝を抱いた。

五郎は最早や何をする必要もない事を知つた。只だ氣掛りなのは母である。晶さんも待つて居るだらう。彼は恚う思つて急ぎ電車に乗つた。

家に歸ると晶子は迎ひに出た。

「どうして？」といふのも小聲である。

「間に合はなかつた」と五郎も打萎れて「御母さんは？」

「兄さんの御歸りをお待ちして居ますわ」

「慙うなるとね、我れくはお母さんに氣を付けなきやならんよ。御父さんの方は石尾さんが萬事引受けたからね」

「でも何とかならなかつたでせうか、妾も先刻から泣いてばかり居ましたのよ」

「慙う言ひながら晶子は又もや歎歎りあけた」

「泣いちゃ不可よ、お母さんに泣顔を見せると悪いからね」

「えい」と答へながら晶子は氣の弛みと共にもう涙を拭へる事が出来なかつた。

二

母の室へ入ると、床の間に父の寫眞を飾り其れに蔭膳を据ゑて母はしみぐと睨めて居た。

「只今」

「おう御歸りかへ」

「駄目でした。併し御母さんや私達への傳言だけは石尾さんから聞て來ました」

「爾かへ差入ものや何かの事は石尾さんが萬事やつてくれたらうね」

「無論です」

「どうせ長い事はあるまいから」

「で、御父さんの傳言といふのをお話しませう。第一にですな」

「面會に來ては不可いといふんだらう」

「爾です。其れから僕と晶さんは」

「東京へ行て學校の方を早くやれといふんだらう」

「爾です。其から御父さんは自分に悪い事がないのだから……」

「世間へ對して耻るに及ばないと仰有つたんでせう」

「お母さんは皆な御存知なんです」と五郎は驚いて言た。

「それは解つて居ます」

「昨日御父さんが言置て行たのですか」

「いゝえ何も仰有らないけれども」

五郎は流石に母は豪いと今更ながら感服した。病後の事と言ひ、婦人の身であるからどんなに落膽してゐたらうと其ればかりを心配して來たのだが、言葉やら動作やら毫しも取亂した状がなく、眼には一雫の涙さへ浮べぬ氣丈夫さは普通の女には出来ぬ態度である。

「始終居眠りばかりして豚の様にでぶく、肥つて、まるで無能の様だが、何か大事があると其の本色が現はれるんだ」と父が曩日冗談紛れに言つた言葉を想ひ出した。

「私は思ふに五郎さん」と母は靜かに言つた。

「お前達は直ぐ東京へ行つて貰ひたい」

「直ぐに？」と五郎は驚いた。

「あゝ今晚にもね」

「其れは併しお母さん餘りに急です」

「お母さんお一人を置いて私達ばかりが東京へ行かれませんか」と晶子は漸く涙を歛めた。

「いゝえね、實は此の別荘を引拂ふつもりなのでね」

「なぜです」

「こんな立派な家に入つて居ては世間に對しても可くありませんから、私は大阪の方へ行かうと思つて居ります」

「御父さんが爾するが可いと仰有つたの？」

「いゝえ、御父さんはね、此那事があると猶ほと景氣を付けて世間に反抗なさる事が御好ですけれども、いくら正しくても世間を敵としては正しい事が誤解されますから、私達がそこを考へなければなりません」

「いかにも爾だ。妻といふものは良人の氣心を知り抜いて其の足らざるを補ふ様にしなければならぬ。良人の意見にばかり盲従するのは良人を誤る事になるものだ」

晶子は慙う思つて母に感服しながら五郎の方を見やつた。

「其れは御尤もです併し此儘散々になるのもお互に心細いですから四五日待つて下さい」と五

郎は言った。

「それまでに言ふなら爾しませう」

母は敢て逆はなかつた。床の間の寫眞は三人を見詰めて居る。昨日此の席で睦じく語つた人が今は暗い牢獄の人となつて居るかと思ふと、傷まじさが胸一ぱいになつて互に言葉が出なかつた。

「御母様、此の御寫眞は眞面目過ぎて私何だか悲しくなりますから、別なのにしませうよ」と晶子は言った。

「あ、何れでもお前の可い様になさい」

晶子は寫眞箱から笑顔の寫眞を出して飾つた。

「にこ〜にしましたわ」

「それが可いでせう」

飾り代へた父の寫眞は雑誌屋の註文で大きな口を開いて笑つてる顔であつた。「本常に可笑しくて堪らないといふ風に笑つて被居るわね」

三人は凝と寫眞を見詰めた。暖かい家庭に被りやればこそ大きな口を開いて笑ふ事も出来たのだらう。今牢獄の中で何が嬉しくて笑ふ事が出来やう。

三人は同時に慍う思つて淋しく溜息を吐いた。

「これも不可いわ、仍且元の致しませう」

再び寫眞を代へた時三人はもう互に顔を擧げる事が出来なかつた。

三

父の命なら止を得ない、母の事は石尾父子に頼んで、五郎と晶子は上京する事に決した。毎もの上京と異つて父の事があるだけに二人は氣が進まなかつた。

「ねえ兄さん」と晶子は五郎に言った。

「何だか是れで御父様と永い別れになる様な氣がしなくて？」

「そんな事はあるまいけれどももう一度御父様の顔を見たいな」

「私もよ」

「明日は豫審へ廻されるそうだから裁判所へ行つたら見られるかも知らんぜ」
「でも御父様の眼に付いたら御父様は厭がりなさるでせう」

「それも爾だな、其れぢや入口で何處かに隠れて居やう」
兄妹は密かに協議を凝らした。翌日二人は早朝に起きた。母に覺られまいために五郎が一足

先に家を出た。而して梅田で待合して二人は裁判所へ出掛けた。赤煉瓦の宏壯な建物を見て晶子は先づ肝を潰した。

「此麼大きな建物が裁判所なの？」

「あ、爾だよ」

「此の建物の中で種々な罪人が決められるのね」
「爾だ、これが閻魔の廳でまた菩薩の臺だ」

「こんなものが無い方が可いわね」
「僕も爾思ふのだが、これが無かつたら秩序が保たれないからな」

「して見ると人間は放任して置くか悪い事をするものだわね」

「爾かも知らんが……まあ入つて見やう」

二人は門衛に訊いて下足口へ行つた。履物を替へて廊下を通ると只だ雑然たる人語と足音が聞へる。凡ての扉が開かれて其處に無数の人が集まつて居る。其れは人民の控所であつた。人の顔は千様萬態である。訴訟に勝ち目があるので喜色満面の人もあれば、悄然として首垂れてるものもある。通りゆく人をぢろ／＼見てはふ／＼と冷笑するものもあれば矢鱈に燐寸の棒を嚙ちつて疔癢を抑さへてるものもある。今年で三年になるが裁判所が判決をしてくれないと眩して居る者もあれば、裁判ほど不公平なものはないと怒鳴てる者もある。晶子は見るもの聞くもの毎に驚いた。

「大島さんはやられましたな」

と一人の首に手巾を巻いた男が三味線の師匠でもあるかの様に青白い顔をして金のばいふにバツトを挟んで言つた。

「あ、／＼氣の毒な事やなあ」

と骨董屋らしい老人は他の人と話しかけて居た話を中止して手巾の男に答へた。

「あれは大島はんが皆の罪を引受けたんや」
 「阿呆らしい、そんな事おまつかいな。あれは大島が悪いんだつせ」と隣の色眼鏡を掛けた髭

を生やした男が横鎗を入れた。此の男は年百年中裁判所へ入浸りになつて居る男で、控所の人々の話を聞いては割つて入り、而して訴訟の世話をし、幾許かの口錢に有りつくと云ふ、一種の裁判所に住む寄生蟲である。其の代りに此の男は何んでも知つて居る。此の男の言ふ處に依れば、此の裁判所が明治何年の何月何日に起工して何年何月に竣工した事から、其の時の裁判長は誰で面白い事件には怎ういふのがあつたとか、何とかいふ書記はもう年期が満ちたから是れから検事になるだらうとか、茶店の株は幾何になつたとか、貸草履は傷むのが早いから此頃では下足の方で利益が薄いと云ふとか、検事や判事の大學卒業の年月から妻君の美醜や人使ひの巧拙やあらゆる事に通じて居る。そして自分は凡ての判検事の親友であつたり先輩であつたり、一緒に藝者買をした仲であつたりするのだから、自分の手を経れば訴訟が巧く行くといふ風に話し込むのであつた。

四

父の噂が出たので二人は片隅に小さくなつて背後を向けて居た。

「いや、私は大島はんを能う知つて居まんのや、あの人は決して悪い人やおまへん、ほんまに」と老人は齒の無い口をもぐもぐさして言つた。

「そやかて新聞を見なはれ、豪いこつちや」と何でもや先生が言つた。

「新聞は當てになりやせんがな」と老人は躍起になつて「私もな、娘がおましたんね、それがな、新聞で悪口書かれましたんや、情夫があつて妊娠やと書いたんや、娘は去年十五で小學校を出たばかりだんね、阿呆らしい其れでも新聞に出すと世間が信用しまんね。娘は氣狂の様になつたさかいに田舎へやりましたんや、私はもう新聞いふたら何一つ信用しまへん」

「左様々々」と手巾君は合槌を打つた。「私の隣に新聞記者が住まつて居る、その人はな未だ二十五だんね、學問はあるか知らんけどもな、二十五や六で世間の事が解りまつかいな、何にも知らん人が人の事を書くのやさかい狂人に刃物を持たせたよなもんや」

「二十五でも六でも立派に判検事になつてゐる人が多いちやありませんか」と何でも屋先生は又駁して「それは爾と大島さんの豫審は何時だらう」

「もう直きだつしやろ」

晶子と五郎は顔を見合せて嘆息した。實際社會は危険だらけである。無定見無方針の者が新聞記者となつて矢鱈に其日々々の蟲の居處次第で筆を廻す。學校から出たばかりの判検事が學理一方で人間の運命を決めてしまふ。そこに人民の不信が萌しそこに不平の聲が湧く控訴、上告、財産を盡くしても冤罪を雪ぐに由なき無辜の民がどれだけある事だらう。新聞で見ると父は大悪徒である。裁判官から見ると矢張り爾かも知らん。否、日本の法律の上から言ふと父は立派に背任罪を犯してゐるかも知らん。併し父の志は高潔である。此の高潔を知つてゐるものは幾人あるか、自分達二人と母、石尾父子位のものである。高潔の人を新聞と法律が葬る。これほど残酷な事があらうか。五郎は愠う思つて席を起した。此の時廊下は俄に騒々しくなつた。

「二階だ」と人々の言ふ聲が聞える。二階へ上るもの、又下へ降りるもの、雜然として織るが如き中を二人は潜り抜けた其のどよめく人の渦巻の中を編笠の儘通りゆく二三の者がある。

「大島や〜」

二人ははつと立悚んだ。如何にも編笠に顔は見えねども、黒紋付の七子の羽織、桔梗の紋は父に紛れない。晶子はよろ〜と後ろに退つた。五郎は確乎と其の脇を我が脇に絡んで小聲に囁いた。

「しつかりしてくれ」

「えい大丈夫よ」

晶子の身體はぶる〜と顫へて居た。五郎は凝と唇を嚙んだ。群集の頭の上へ編笠が行く扉口で巡査が群集を追ひ拂つた。さつと崩れる人波と共に父は扉の中に消えた。扉は堅く鎖された。

ほんの一瞬間である。顔も見ず、ものも言はず、只だ淺ましい編笠姿の父だけが頭の底に深く刻まれた。

「私来なければ可かつたわ」と晶子は言た。

「うむ、来なければ可かつた」

と五郎も言った。二人は直ぐ裁判所を出た。と自分と摺り抜ける様に走つて行くものがある。
 「六藏君」と五郎は聲を掛けた六藏は振向もせず構内に走り入た。

五

後ろ髪引かるゝ思ひを残して二人は東京へ出發した。家を出る時松子は二人に慫う言つた。
 「例の事をなるべく早くね」

「例の事で何ですか」と五郎は言ふ。

「お前達の事です」

「それどころではありません。お父様が出て来ない中は」

母は其の上にも言はなかつた。二人が汽車に乗らうとする時、六藏が宙を飛んで来た。

「喜んで下さい」と彼は呼吸せき切つて言つた。

「僕は奥田の秘密を突き留めました。今一と息ですから吉報を待つて下さい」

「吉報とは？」

「今度の事は奥田が張本人です。僕は奥田の秘密を捕へて其れと交換に銀行の陰謀を白日させます」

「秘密とは何だ」

「あれは賣國奴です。それももう直證據を挙げます」

「何だか知らんが餘り輕率な事をしない様にしたまへよ」

「大丈夫です。では左様なら」

慫う言つて彼は兩方の袂から幾つもの柿を取出し「汽車で食べて行て下さい」

「難有う」と五郎は六藏の眞心を嬉しく思つた。鈴が鳴つた。汽車が動き出した。と六藏は又

追ひかけて窓に添うて走りながら「もう一つ残つて居ました」と懐から柿を出した。

「左様なら」と晶子は言た。

「安心して下さいよ」と六藏は言た。

「親切な人ね」と晶子は追加の柿の事を思ひ出して微笑した。

二人の心は暗かつた。編笠姿の父は何時まで眼から離れなかつた。

「寢臺を聞いて見やうか」

「い、わ、離れくゝになると淋しいわ」と晶子は言った。荒い大島の袷に對の羽織を着て、白粉は塗けないが、生地の薔薇色の頬に無雑作な廂髪の後れ毛が絡んだ。氣苦勞に面竄れして眉と眉が狭まつて見ゆる。晶子は袋から毛糸と編針とを出した。而して霎時其れを動かして居たが、廳て窓の方を向いて袖口で眼を拭いた。

「大丈夫だよ、御父さんは直き出て被來やるよ」と五郎は言った。

「でもねえ、お母さんがお可愛さうですわ」

「仕方がないさ」

「二人は黙つた。」

「おい食堂へ行かう」

「食堂へ？」

「ベルモットかキュラソーでも飲んで少し眠ると可いよ」

晶子は氣が進まなかつた。併し五郎に心配させるのも本意でない。

「えい参りませう」

二人は食堂へ入つた。食堂は充満であつた。二人が漸く空席を見付けて坐つた。旅行慣れた人は恚ういふ事が眼に付くだらう。東京から下りの汽車食堂にある客は大抵洋服姿か、但しは和服でも羽織を着て行儀正しく中にも婦人はきちんと身嗜みを崩さないが、大阪からの上り汽車には、着流しの客や、尻を捲つて居る人や、洋服でも上衣なしの甚だしきは寢巻にバンド姿の人もある。婦人に至つては特に甚だしい、伊達巻をぐるぐる巻にして食卓に着く、是れが關東と關西の食堂状態である。

二人が軽く食事を取りつゝある室の一隅に大きな聲でボーイと問答して居る男がある。

「おい二人床を申込んで置いたのに一人床一つとは不都合ぢやないか」

「それは受付けた者の間違でしたらう」

「誰の間違でも、責任は其方にあるのだ」

「そう仰有られても困ります。ですから上の方をもう

いで御辛抱

「トは不可よ、婦人だから」

「貴方様が上の方で御辛抱下されば……」

「そういふわけには不可のだ。上へ行かうと下へ行かうと貴様の差圖は受けんよ」

「それは御無理でございます」

「何が無理だ」

「そんな事を仰有らずと御病人でない限りは別々の寢臺になさいまし」

食堂の客はにつと笑ひ出した。

「なにを貴様、俺を知らんか」

と男は怒鳴り續けた。其の傍に藝者らしい伊達巻の女が眞紅な顔をして横を向いて居る。男は奥田の息子富男であつた。

六

東京へ着くと高井兄妹は驚き喜んで迎へた。彼等は新聞で大島家の破産一件を知つて居る。

而して遙かに胸を痛めて居たのであつた。

「よく來られたね、實に飛んだ災難だつたね」

荷物を解く間もなく高井兄妹は五郎一家の様子を訊ねた。而して五郎が精しく語る一語一語に眉を顰めたり嘆息をしたり、終りには悲憤の涙に暮れた。菊子は堪らなくなつて歎歎りあつた。落ぶれて袖に涙のかゝる時、親友の優しき慰めほど嬉しい事は無い。今更の様に品いた。

「もう此話は止さう、久し振だから今日は愉快に遊ぼう」と五郎は言ひ出した。

「あ、爾だつた。兎も角も風呂へ入つて來給へ」と實が言ふ。

「僕は行きたくないから晶さん行くが可い」

「私風呂屋の風呂へ入つた事がないから」と晶子は途方に暮れて言つた。

「だつて仕方がないよ」

「私と一緒に行きませう」と菊子は氣輕に立上つて「行きつけると其那でないわよ。つて風呂だけは氣持が可いわ」

「では行きませうか」

半好奇心に驅られて晶子は行く氣になつた。

「あ、行け、歸りに何か菓子頼むぜ」と實は言つた。

晶子は荷物を解いて中から石鹼や白粉の壘や櫛などを出した。

「兄さん、貴方の手拭を拜借するわ」

「あ、可いよ」

「石鹼も兄さんのを持つて行つてよ、私のが解らないから」

「可いとも」

白銅の齒磨箱に二本の楊子が差してある。一本は五郎ので一本は晶子のであつた。彼

れを開きかけたが急に閉めて微に頬を染め五郎の顔をちらりと覗いた。五郎は黙つて其の美し

い手元を見詰めて居たが、霎時経てむら／＼と妙な氣持になつた。其れは今まで全然經驗のな

い心の微動であつた。幼い時から兄妹として一緒に育つたのだから、同じ手拭や同じ石鹼やを

使ふ事は珍らしくない。同じ楊枝箱に楊枝を入れた事も今日ばかりではない。だが此の親みが

も一緒にしたのであるまいか。

此の考はほんの一分や二分間の閃電的な感じであつたが、併し五郎には全然今までは異つ

た世界に二人が漕出した様な氣がした。同時に嬉しい様な飯事の様な擦つたい不思議さがほん

の一瞬間に湧いた。而して直ぐ實の方を見やつた。實は何事にも氣が付かぬらしく立上つて輕

節を搔き初めた。

「何をするの兄さん」と菊子が言ふ。

「五郎君の好きな雑煮を作るんだ。歸りに切餅を頼む」

「御雑煮なら五郎さんより晶子さんの方がお好きですわ」と菊子は擲論ふ様に言ふ。

「爾かね」と實は急所を突かれてま／＼しながら、「早く行つて来いよ」

「世帯を持つたら晶子さん、兄さんを輕節搔に雇ふと可いわ」と菊子は笑つて「さあ参りませ

う」

錦仙の荒い飛白の拾を着た菊子と大島飛白の晶子と二人の白い顔や艶々しい頭や、色彩のあ

り

る帯が立關の方へ消えると懸て、

「私手拭や何かを持って行きますわ」

「あら可いのよ、私持つて行くから」

といふ聲と共に草履と下駄の音が聞えた。

「女といふものは何か饒舌らなければ家を出られないものと見えるね」

五郎が慙う言つた時、實は一生懸命に鯉節を搔いて居た。

七

鯉節を搔いてる實の武骨な手つきを見やりながら五郎は黙つて空想に耽つた。

出た二人の若い姿と清らかな聲を追うて雲時其の美しい幻影の中に心を泳がした。

「二人は風呂へ行た。而して二人の男は家に残つた」

彼は慙う、たゞと其れとは何の聯絡もない様な別種な考へがふいと浮んで来る。

「僕は高井に話さなければならなかつたのだ。爾だ其れを忘れて居た。其れが一番大切な事で

又た一番急がなければならん事なのだ」

これで彼は薄雲が剥けた様に判明した心持になつた。

「話すのは今の中だ、爾でない」と段々話せなくなる」

慙う考へて彼は實の方を見やつた。實は矢張り手先を動かして居る。

「さあ何と言つたものだらう。晶さんは僕の妻にするから君は諦めてくれ。其れが言へるだらう

か、元とく僕が勧めたのだ、其れを今更ら……」

此位の事は言へるだらうと思つて居たのだが扱て慙うなつて来ると唇は石の如く堅くなるそ

こで彼は實の舉動を窺つた。

實は鯉節を搔きながら矢張り空想に耽つて居た。

「二人は姉妹の様に一緒に風呂へ行た。どつちも美しいが、晶さんの方が猶ほ美しい。あれが

僕の様なもの、妻になるとは實際驚くべき事だ。僕は何といふ果報者だらう。只だ僕は果して

彼女を幸福にする事が出来るだらうか、鈍才で無器用で世渡りが下手だ。腹が立ても怒る事が

出来ず、言ひたい事も充分に言へぬ。こんな詰らない男が、晶さんの様な立派な令嬢の良人た

る資格があるだらうか。若し資格がないとすれば修養して作り士けるんだ。兎も角もあれが僕

の妻となるんだ。僕は何と言って五郎君に御禮を言はう。今度晶さんを伴て来たのも僕と接近せしむるための手段だらう。いつもながら五郎君の親切は感謝の外ない。彼は自らの幸運が餘りに過大なのに驚くと共に此の幸運は凡て五郎の賜であると思つた。而して又た其れから其とれ自分の過去を回想した。

「僕はねえ君」と彼は突然誰れに言ふともなく言つた。五郎は吃驚してその方を見た。「僕は幼さい時から苦勞をしたよ、僕の父も僕も實際不幸だつたんだ。言は、社會の影ばかりを歩いて居た様なものだ。其れが今俄に天から降た様な幸運を背負ひ込むなんて僕は全然夢の様だ」

「何だい君」と五郎は不意打を食つて再び驚きながら言つた。

「何がつて君、僕も種々考へたんだがね、只だ僕は臆病だから言はなかつたばかりだ。君に依つて初めて勇氣を得たのだ。其れにしてもね氣掛りなのは嫌だがね、どうか頼むよ、妹を殺すも活かすも君にあるのだからね」

「何を言つてるんだよ君」

「何だつて君、例の事だがね」

と實は顔を舉げて五郎を見やつた。

「うむ、結婚問題か」と五郎は先手を打れて少し慌てながら、

「實はね、あれに就て君に話したい事があるんだ」

「うむ僕も話したいと思つてるよ。兎に角僕は君に感謝するよ。僕の生命は君に預けるよ」

「だが君、君は晶子を愛してるかね」

五郎は注意深く先づ慙う言つた。

「なに？愛してるか？君！僕が晶さんを愛してるかと訊くのか、其れは君、其れは」と呼吸を窘ましたが感情が先になつて言葉が出ない。彼は焦れつたさうに鯉節を搔いた。

「そんなに鯉節を搔いて什麼する」

いかにも鯉節は箱に溢れて疊に零れて居る。彼は忽ち慌て、拾ひ上げた。

「可愛さうに何んにも知らないんだ。僕には言へない」と五郎は腹の中で言つた。

五郎は二階へ上つた。彼は先づ第一に室内の整頓に驚いた。丁度此家へ移轉の當日電報に依つて大阪へ出發したので、書架や卓子の整理は毫もして居なかつたのだ。其れが今ま書架には本が順序なく詰められて、油繪や寫眞の額が自分の平素好きなものを掲げられ、卓子や椅子まで綺麗に置かれてある。

「誰が整理したのだらう」と彼は肚の中で思ひながら仔細に見廻した。書籍は獨逸語と英語との區別は勿論の事、文學哲學宗教といふ風に並べた工合や、シリーズとシリーズとの對照なども自分の理想通りである。彼は慙う思つた。

「高井がやつてくれたのだらう、でなければ僕の好きな順序を知てるものがないのだから」床の間には軸物を掛けなかつた。而して無名の作家のミレー風の大きな田園收穫の油繪が掛けてあつた。其れを背後にして腕椅子が置かれてある。其れは五郎の最も好きな位置であつた。凡てが氣に入らぬ彼は不圖二つの花瓶が眼に付いた。一つは本棚の上に、一つは床の間の卓の

上に、卓の上のは紅葉の一枝であつた。本棚の上のは黄菊であつた。而して黄菊の下には鼈甲色の髮針が一本載つてあつた。

「菊子さんだ」と五郎は急に氣が付いた。「菊子さんが凡てを整理したのだらう。慙ういふ面倒な事は大嫌ひな女だが能くやつてくれたものだ」

「あ、あの女は僕の妻になる氣で居るんだ。僕は何故あの時彼は室内を歩き出した。」

「今僕と晶さんと結婚すれば、負傷者が二人出来るわけだ。これは什麼した事だらう」

「さあ、これは什麼した事だらう」

「今更の様に驚いた彼は立停まつて自分の足元を見詰めた。妹を與らう妹を貰はうと約束した事が今や四人の間の大問

が晶子と兄妹でない事を知つて居たら、恚那事になるのでなかつたら
 てるだらうか。

「はたと觸れた大切な問題は是である。」

「愛してる〜」と彼は獨りで言つた。

「だが、菊子さんを愛してるだらうか」

彼は腕椅子に腰を落して敷島に火を點け一吹き煙を見やりながら、

「さあ解らない、愛して居ない、だが愛してるかも知らん。少くとも愛する事が出来る。」

此の解釋は彼れ自ら極めて不徹底なものだと氣が付いた。そこでもつと明瞭に自分の心た

かめたいと思つて再び歩き出して書棚の前に立ち停まつた時、菊子の忘れた髮針が眼に付いた。

彼は其れを指先に摘んで其の半透明な銚色の中に隠見する黒雲の様な班を見詰めた。彼は急に

其れを元の位置に置いた。而して慌て、椅子に歸つた。

「僕は、僕は、何といふんだらう。僕は兩方を愛してるのだからか其れは享樂主義者だ、惡魔
 の心だ、いや〜僕は其れものぢやない」

否認する様に眼を閉ぢて又た考へる。

「一番愛するものは晶さんで二番目が菊子さんだ。爾だ、僕は博愛者だが等級があ

これが青年には誰しもある事かも知らん。併しそれは善い事だらうか悪い事だらう

九

今まで考へた事のない問題が續々と出て來るので五郎は四途路になりながら霧を

を見やうとする様に、頭を静め静め考へを繰り初めた。晶子も愛せば菊子も愛する

に等級があるだけだとすれば、愛といふものは極めて薄弱なものだ。雲が空氣と風

くなつたり薄くなつたりする様に愛も只だ濃淡の差別位のものなら失戀に泣く人も

る妻を得て歡喜に酔ふものもなくなる筈だ。して見ると僕の愛は月並な愛かも知

らぬ。僕は此那事を考へた事はないのだ。だから自分で自分が解らないのだ。

もう一本の敷島に火を點けて其れを吸はうともせず其儘に又考へを續けやうとした。途

と草履の音が聞えた。

「あ、静ね」
菊子の姿が扉口に現はれた。
「あ、貴方でしたか」と五郎は思はず失望した様に口を滑らして「餘り早かつたもんだからと言ひ加へた。」
「い、え今日は緩くりよ」と菊子は無邪氣に「人が居なかつたから御風呂で髪を洗つて來ましたのよ、綺麗になつたでせう」
「あ、綺麗ですな」と五郎はまご／＼と言ふ。菊子は洗髪の艶々しい光を背後へ垂れて肩に當てた綿布の上に軟らかな紫の影を流して居た。
「貴方ちよいと煙を掛けて頂戴なね」

「あ、静ね」
菊子の姿が扉口に現はれた。
「あ、貴方でしたか」と五郎は思はず失望した様に口を滑らして「餘り早かつたもんだからと言ひ加へた。」
「い、え今日は緩くりよ」と菊子は無邪氣に「人が居なかつたから御風呂で髪を洗つて來ましたのよ、綺麗になつたでせう」
「あ、綺麗ですな」と五郎はまご／＼と言ふ。菊子は洗髪の艶々しい光を背後へ垂れて肩に當てた綿布の上に軟らかな紫の影を流して居た。
「貴方ちよいと煙を掛けて頂戴なね」

「煙を？」
「えい」と菊子は五郎の掛けた腕椅子の凭れに片手を掛けて片手を五郎の膝に突き、膝の様な頭を五郎の胸の邊に摺り寄せた。
「頭に煙草の煙を掛けるのよ、早く乾くから」
五郎は迷惑さうに口を窄めて煙を吹きかけた。
「もう可いですか」
「もつとよ、髪を割て中に入れるのよ」
五郎は再び煙草を吸ひかけた時晶子の姿がちらりと見えた。はつと五郎がの祕密に觸れた様な當惑した態度で立竈んだ。
「お前は髪を洗はなかつたのかへ」と五郎は慌て、言つた。
「い、え」と晶子は自分の態度を耻る様に微妙しく躊躇して歩み寄り、「と四邊を見廻す。」
「可いでせう、皆んな私が整理しましたのよ」と菊子は起き直つて

「私随分苦心しましたのよ。御歸りになつたら貴方を吃驚さしてあげ、
 「全く能く行届きましたね」
 「感心でせう」
 「うむ」

「私毎日此處へ来て貴方が御歸りになるのを待ちして居ましたのよ。私
 の名ですから私は書棚の上に置きましたのよ。其れから窓掛ね、貴方は強
 青の方が腦のために可いだらうと思つて青にしましたのよ。あら此那處に私の髪
 爾々私昨日此の室で空想に耽つて居たので忘れましたのよ」
 「なるほど爾ですか」と五郎は妙に他人行儀な返辭をして晶子の方をちらりと覗いた。正し
 て餘りに狎れくしい菊子の態度を頗る迷惑に感じ、どうかして菊子だけが下へ降りてくれ、
 ば可いと思つた。だが菊子は一尙無頓着である。

「私ね、貴方の本箱でも抽出でも何でも開けて見るもんだから兄さんに叱られましたのよ、見
 たつて可いわね。貴方は私に秘密がないでせう。ねえ晶子さん」と晶子に向つて嬌笑して見せ
 る。

「爾ですわ」と晶子は俯向きながら答へたが其の聲に活氣がなかつた。

「僕の秘密は晶さんが一番能く知つてるさ、ねえ晶子さん」と五郎は晶子の氣を引立
 言つた。晶子は顔を舉げて淋しく笑つた。

「雑糞が出来たよ」と下から高井が叫んだ。

「さあ行きませう」と菊子は先になつて室を出た。

「兄さんは？」と晶子は親しげに五郎を振向いた。眼は美しく輝いて居た。

「うむ、食べやう。晶さん今晚二人で洋食を食ひに行かうか」

「皆さんでね」

「二人きりでも可からう」

晶子は室を出た。

「あ、此那に方々へ氣兼ねしちや敵はん」と五郎は思つた。

「洋食なら私も賛成よ」と下で菊子の賑やかな聲が聞えた。

「あ、く」と五郎は手を額に當た。

一〇

只だ臆に考へると五郎は晶子を愛して居ると共に菊子をも愛して居るに、同時に見る時には彼の心は全然晶子に注がれて居ることを自覺した。懐輕は何でも言てしまふ菊子の率直な性格が氣に入らぬではないが、晶子の肅しやかで而も快活な何處かに品位のある態度の方が遙かに優つて居ると思つた。特に晶子とたつた二人限の差向の場合には是れが自分の妻になる女だと思ふ心は既に充分晶子に對する戀を煽つた。元より幼少から兄妹として育つたものが俄然此那事情になるといふ事は何となく不自然で急に打解け難い牆壁が築かれた様なもの、其れは外面だけで、幼少から互に氣質を識り合ひ何も彼も承知して居るだけに心と心の結び目は逆も他人の想像が出来ぬ程に堅いものであつた。五郎は自ら其れを知つた。其れと同時に實に對して濟まないといふ氣が充滿になつて又菊子の無邪氣な態度を見ては流石に同情に堪へられなかつた。

「此那状態が永く續いたら俺は苦悶して死んでしまふだらう」

五郎は慙う思つた。母の許へは毎日晶子と二人で手紙を出した。母からも手紙が来る。依ると父は保釋に間もあるまいといふ。二人の心は段々明るくなつた。父の消滅に上首尾の方であるが、四人の問題は段々深い淵へ落ち込んで行く様な氣がした。時として五郎は晶子と二人だけで永い閒話して見たいと思ふ。

「晶さん、僕の室へ御出」

慙う言ふ下から直ぐ實に氣の毒だと思ふのであつた。彼は晶子に對する愛が深實に對する同情も從つて深くなつて行く、丁度太陽の光が強烈であれば陰翳も從つて濃厚である如くで、彼は時によると實の所有を侵掠する様に思はれて不義の罪に心を痛めるのであつた。其れは夢にも知る由もない。既に四人が約束した事であるので、實の戀も益々募つた。同時に菊子も殆んど縦横無盡に五郎を我が物顔にする事もあつた。

丁度日曜の早朝であつた。四人は女中の婆さんに留守を託して鵠沼へ出掛けた。秋も閑の好天氣として汽車の二等室は満員であつた。菊子は一番先に群がる人を押し分けて座席を占領し

た。三人が入つた時には殆んど席がなかつた。

「此處へお掛けなさいよ、此處へ」と菊子は五郎に言つて自分の席を譲らうとした。

「お前は素早いね」と實は驚歎して五郎に着席を薦めた。

「いや、晶さんと二人でお掛け」と五郎は晶子に言つた。二人の女は席に着いた。二人の男に席がなかつた。

「三等へ行かう」と五郎は言つた。而して實と共に扉を出た。

秋の日はかん／＼照つて硝子窓から二人の頬に射し込んだが、暑くはなかつた。明るい朝の光線が顔から通り路へ而して向ふの緋色の床へと動いた。郊外の草は色づいて、遠き森には紅葉や黄葉が彩つて居た。晶子と菊子は霎時語つた。其れはほんの詰らない世間話であつたので直ぐ中絶した。

「何か雑誌を買つてくれば可かつたわね」と菊子は言つた。而して直ぐ起つて室を出た。「此頃は女同士でしみ／＼と話す事がなくなつた。話しても面白くない、どういふわけだらう」と晶子は一人で考へた。

「あの方は何んにも御存知ないんだ」と晶子は聽て思ひ續けた。そこへ五郎がふら／＼と来た。

「あら菊子さんが今まお迎へに被行つたわ」

「うむ、横濱の歩廊で降りて茶を買つて居たから見付からなかつたのだらうだらう」

「可愛さうですわ」

「なあと構はんよ、併し菊子さんが居ないとお前淋しいかへ」

と五郎は呼びに行きさうに言つた。

「い、え可いわ」

「僕がお前に相談があるんだがね」

「私もよ兄さん」

「爾か、僕はね、あの事を早く言ってしまったかと思ふんだ。何時までも秘してると罪が
晶子はほつと顔を染めて指先で額際の毛を弄りながら「爾ね」

「お前は爾思はんか」
「私も爾思ひますけれども菊子さんが……」
「氣の毒？」

「えい、でも兄さん」

晶子は何か續けさうにして急に口を噤んだ。

「何だ」

「兄さんは菊子さんを愛して被居やるんぢやないの？」
「そんな事があるものか」と五郎は兩側ともに西洋人であるのに安心して囁く様に言った。

「何んだつて其那事を言ふんだ」
「でも若し爾なら、私……」

「譲らうといふのか、馬鹿な、兎に角ねお前さへ不承知でなければ僕は今日判然と告白しやう」

と思ふよ」

「あ、可いわ」

晶子は美しい眼をして五郎の顔を睨めたが、唇は少しく顫へて居る

「でもねえ兄さん、爾なると負傷者が出来るわね」
「仕方がないさ」と五郎は俯向いて言った。二人

「貴方を探してるでせうから早く行つて御あけな
席を起した。

元の三等室へ行って見ると其處に面白い光景が
吹いて飴を賣つて居る。其れは頭に笠の様な帽

「これは正真正銘の朝鮮飴、内地の飴の様
氣を著へて腹の髓まで甘露の味が七日七夜

鹿にしてやがらあ、腹の髓までだよ
職人體のりが言つた

「下さい」と朝鮮人はここにこして「
脳の悪い人、脚氣の人、婦人産前産
頭痛に眩暈に眞田蟲だらう」
と今一人の男が交ぜつ返す。

「えい、朝鮮飴、人參飴、滋養飴、一袋たつた
箱から出した飴を一人くくに配る。

「一つ位ちや検査が出来ない。五六十本奮發みな、
はいく、百本でも二百本でも御望み次第で」

「ロハぢやあるめえ、巧く出来てらあ」
乗客はいろくいな警句を吐きながらぼりく、飴を食ひ

一一

一廻り口試しの飴を配布し終つて朝鮮人は又も高らかに言つた。

「えい、朝鮮本場の人參飴、不老不死の長壽飴……」

「おい此處へくれ」

「此處へもくれ」

「こいつあ美味えや」

「ロハの方がもつと美味えよ」

八方からの聲掛りに朝鮮人は萬遍なく御世辭を振撒きな
がら飴を其れから其れへと手渡した。手の届かぬ客へは手
近の客に配達を頼むばかりに、忙がしい。と囂々たる喧騒
の中に急に大きな聲が際立つて聞えた。

「なに俺を泥棒だと吐かしやがるな、憚んながら朝鮮人の
飴を食つて錢を拂はねえ人間では無えんだ。俺あ日本人だ
ちやん、ちやんの癖に巫山戯た事を吐かすない」

先刻の職人風の男が朝鮮人の胸倉を取つて腰掛の間に押



し倒さうとした。押された朝鮮人は後生大事に箱を抱へて、

「亂暴お止め下さい。私は館屋が商賣、錢貫はない困る。貴方館一と袋食べた、錢拂はない、其れ宜しくありません」

「まだ吐かしやがる、ちやんちやんめ」

「私、ちやんちやんめありません。朝鮮日本合同した、私日本人あります」

「巫山戯るない」

拳骨を固めてばかりと横顔を打つと朝鮮人はばたりと倒れて、箱は通り路にがりりと覆された。銅貨銀貨がざらざらと零れて白い飴の粉の中に埋没する。

「撲つちまへへ〜」と職人の伴侶らしい男は零れた飴を懐に渡ひ込み、残つたのを二三本一度に頬張つた。

「貴方方、泥棒ある」

と朝鮮人は落ちた錢と飴の上に腹這になつた。其の背中の上に靴を穿いたまゝの足が二三本閃いた。

途端に茶碗と土瓶が空を飛んで職人の顔に當つた。はつと思ふ間もなく長い臂が燕のいて次から次の頭や横顔を掠めた。

「何をしやがるんでえ」

職人共は一齊に立上つた。

「黙れッ」

五郎は五尺六寸の身體を眞直に立て、彼等を大喝した。

「お前達は日本人か」

「何を言つてやがるんでえ」と撲られた職人は尻込をしながら片肌を脱で虚勢を張つた。裸の肩を五郎は平手でびしやりと僕りながら、

「おいお前達は日本人かと聞くんだ。日本人が朝鮮人の飴を盗んで多數を恃んで暴行を加へるとは何といふ事だ。其れが日本人なら日本人は朝鮮人よりも下等な人間になる、さあ盗んだ飴を返せ、返す事が出来なければ代價で償へ、其れも出来なければ此に兩手を突いて此の館屋に謝罪しろ」

五郎の権幕に驚いて職人共は抵抗する勇氣もなかつた。

「さあ謝罪をせんか」と五郎は叫んだ。

「ちやんく〜に謝まるのは厭だ」と一人が言った。

「それぢや金を返せ」

「俺は知らねえ」

「なに？知らないと言ふか」と五郎は一人の胸倉を捉へて拳骨を振り上げた。

「ま、ま、待て下さい」と職人は慌て、「錢を出します」

「さあもつと出せ」と五郎は言った。

「其れぼつちぢやない。おい飴屋君、君は幾何の損害だ」

「食べた飴と粉になつた飴とで二圓ばかり」と朝鮮人は床板に坐つて錢を拾ひながら言った。

「さあもつと出せ」と五郎は言った。

「私や五錢だけだ。おい久さんお前も若干か出せよ」と職人が向ふに立てる男に言った。

「俺は一本も食べやしないよ。虎さんお前先刻しこたま懐に入れたぢやねえか」

「冗談ぢやねえ、俺は一寸其の量目を試して見ただけだよ」と虎さんは言った。

「皆な嘘を吐くなら可しッ」

「憚う言て五郎は藁口から二圓の紙幣を出して朝鮮人の前に頭を下けた。

「君の損害は僕が辨償して置くどうか許してくれ給へ、日本人は皆な憚ういふ野蠻人ばかりではないと思つて安心して商賣してくれ給へ、僕は日本人に代つて君に謝罪をする」

一一三

日本人に代つて謝罪すると言つた時、朝鮮人は五郎の顔を凝と見詰めた。

「貴方、宜しい、錢要りません、貴方は立派な學生さん」

「いや取つてくれ給へ、飴屋君をして僕に免じて此の野蠻人等を恕してやつてくれ給へ、僕は君に謝罪する」

再び頭を下けた時五郎の眼は涙に光つて居た。

「飴屋君、君は口惜しからう、悲しからう、不法な侮辱を受けても訴ふる力がないのだからな

國の名は替り政治が替り凡て眼に見ゆるものが替つて、替らないものは只自分が生きてるだけだと気が付いた時、君等の國民はどんな思ひをしたらう。而も君は日本を信じ日本の人民を信すればこそ恚うして商賣をしてるんだらう。其れが今恚ういふ目に逢ふと君等は日本を信じなくなろ。丁度日本人が米國へ行くと矢張りこれと同一な侮辱を受けるんだ。文明の先輩顔をして人種の毛嫌をするのは世界の罪惡だ。此の罪惡を今此の野蠻人共が犯して居る。此奴等は日本人だと威張つて居るが、本當の日本人は恚那ものでない事を僕が證明する。朝鮮人も日本人なんだ。彼等はなぜ日韓の區別を立てるか、なぜ同じ陛下の臣民を輕蔑するか、なぜ朝鮮人は人間でない様に言ふのか」

五郎は此まで言つて胸が充満になつた。彼は自分自身が朝鮮人の子である事に氣が付いたのである。

「五郎君」と實は袖を惹いた。

「もう止せよ」

「おい日本人」と彼は職人共に向つて言つた。朝鮮人も日本人だ。少くともお前達よりは上等

な國民だ」

「五郎君、五郎君」と實は再び言つた。汽車は藤澤に着いた。

「もう降りるんだよ」

「あゝ爾か」

五郎と實が汽車を降りた時どつと背後に笑ひ聲が起つた。

「朝鮮人も日本人だよ」と職人の久さんが五郎の假聲で言つたので、

晶子も菊子も汽車を降りた。四人が停車場を出た時、例の飴屋がのそ／＼と出て來た。

「貴方有難う」と彼は言つた。

「君も此で降たのか」と五郎が言つた。

「あの人達が亂暴します。私逃ける宜しい、私の國弱い、日本に負る、逃ける上手あります

處へ行くんだ」

○何處へ行くか解らない、左様下つ

り直して箱を肩に揺り上げ「左

の片側に日が射して並木の柳は黄ばむでちりくになつて居た。大きな帽子は何時まで
いつ隠れつした。

「氣の毒だなあ、亡國の民ほど惨めなものはないね。踏み付けられても起上る勇氣がなくなる」と
と實は慨然として言つた。

「若し地を替へて日本が他に併合されたら什麼だらう」と五郎も感に堪へぬもの、如く言つた。
「日本は其那事はない、決してない」と實は何かを抑へる様な手つきをして言つた。

「日本人は幸福だなあ」と五郎は言つた。其の心持は實に解らなかつた。晶子は獨り凝と五郎
の顔を見詰めて直ぐ俯向いた。

「あら富士山が、あら」と菊子は大聲に言つた。いかにも菊子の指さす方に眞白な富士山が青
藍色の秋晴の空に突き出でて輝いて居る。

「實に可い」と實は言つた。
「日本人は幸福だなあ」と五郎は再び言つた。

鵜沼で電車を降りた。鵜沼は別荘と旅館だけで普通の家が少い。元より四人とも
旅館で休むなどは思ひも寄らない。菊子は眞先になつて濱邊へ突進した。濱
いが、若い同士の事とて間もなかつた。

「さあ〜唄ひませう晶子さん」と菊子は言つた。實は先刻から唄ひたさに
がある。晶子は嫣然して洋傘を擴けた。

「御入りなさいな、日に焼けるから」
「難有う」

濃い印度紅の様な洋傘の色は二人の白い顔に紅く反射した。

眞白き富士の根、緑の江の島」と菊子は唄つた。而して自分で「子守の様
「カチユシヤを唄へ」と實が言つた。

「下宿屋の女中ぢやあるまいし」と菊子は笑つて「兄さん御唄ひなさいよ」

實は實には何にも唄へない。性來無器用なので歌と言つたらカチユウシヤだけでキ
 「僕は其の……晶子さんの前ぢやね」と實は額の汗を拭いてきまり悪さうに言つた。
 「When will you come again, my faithful Johnny」と晶子は唄ひ出した。菊子は直に和し
 い聲は細やかな波を滑つて遠く燦めく白い波の邊りに輝くかの様に思はれた。風は風い
 きらく光つて居る。天と海は秋深き紺碧で、遠くのく方の群がる白帆まで極めて明
 える。實は用意の風呂敷を一枚砂の上に敷いた。而して一枚に五郎と二人で坐つた。五
 人の樂む狀を黙つて見て居た。彼は先刻の朝鮮人の事を考へて居たのであつた。
 「同じく人類に生れて、政治の組織と國民の惰弱のために他國人に輕蔑される。而も其れは
 の故國である。僕の父母の國である」
 何とも言へぬ不快な念が胸の上下を往來する。
 「何を考へ込んで被居やるの？陰氣だわね」と菊子は窘める様に言つた。
 「いや何でもないよ。僕は朝鮮人で興奮した疲勞が來たんだ。さあ大いに遊ぼう」と五郎は言
 つて起ち上つた。丁度二三十間向ふで漁師共が五尺餘りもあらうといふ大きな籠を轉がして居

た。二三艘の船には魚が満ちてびちちと躍つてるのが光つて見える。其れを漁師共はざらざ
 らと笊で量つて居る。
 「鯉よ」と晶子は言つた。
 「い、え秋刀魚だわ」
 「鯛だよ」と實は言つた。
 「見て來ませう」
 三人は走つた。五郎は一人、残つて遠くの潮路が硝子の様に光るのを眺めて居た。と間もな
 く晶子が歸つて來た。
 「私、漁師が恐いから歸つて來ましたわ」
 「何が恐いもんか」と五郎は笑つて、「晶さんどうしても今日あの事を打明けやうね」
 「えい、でも私考へて見るとね、今日は折角面白く遊びに來たんですから」
 「其れも爾だな、併しね」
 二人は歩き出した。小さな波がちよろくと磯を濡らして退くと次には大きな波がざあと二

人の足元まで寄せる、其の度毎に晶子は五郎の腕に縋つて摺寄るのであつた。
 「鯛だつたわ。大きな鯛よ」と菊子に遠くから聲を掛けて漁師に貰つた一尾の鯛の尾を氣味悪
 そうに二本指でふら下けて見せた。併し波に押されて聲は二人に聞へなかつた。
 「兄さん、追ひつきませう。あらずんく向うへ行くわ」と菊子は氣を揉み出した。
 「待てよ菊さん」と實は制めて、
 「お前氣が付かないか、どうも二人は頃日變だよ」

一五

「何が變なの？」と菊子は無頓着に鯛をぶら／＼さして兄の顔も見ずに言つた。
 「或はだね、いつかの話は煙にしてしまふ積ぢやなからうか」
 「煙てなあに？」
 「破約だ」
 「貴方と晶子さんの事？」

「お前と五郎君の事もだ」
 「あら兄さんは何を仰有るの？」と菊子は笑ひ出して「随分神經質ね」
 「併し僕の眼には何となく二人は我れ／＼とあの話をするのを避けてる様な氣がするよ」
 「どうして？」
 「五郎君がお前としてみ／＼話す様な事はないぢやないか」
 「しみ／＼て其那感傷的なんぢやないわ、私何でも好きな事を話してるわ」
 「五郎君は？」
 「五郎さんは氣取つてるのよ。若い人は戀をしてもしない様な風をした小説にあるわ」
 「併し晶さんは僕としてみじみ……」
 「又しみじみなの？兄さんはしみじみがお好きなのね」
 「冷笑かすなよ、つまり晶さんは僕の側から可成く遠ざかる様に」
 「いよ／＼本物だわ」と菊子は鯛を波に捨て、其れを見やりな

「イマックスよ」

「何がだ」

「兄さんは嫉妬深いわね。女の様だわ、嫉妬は弱者の影法師だてストリンド
晶子さんも兄さんを愛すれば愛する程わざと疎くするのよ。恋人には狎
いものよ。尤も私は其の反対だけれども普通の女はね」

「爾だらうか」

「兄さんも戀が深くなつたから詰らない事でも氣に掛る様になつたのよ。お金を澤山
が吠る度に泥棒を思ひ出すと同じよ。戀には癖みといふものもあるのよ。戀をすると弱く
ますからね」

「爾だらうか」

「兄さんが弱いし晶子さんが弱いでせう。双方弱いから遠慮深いのよ」

「そう言へば爾だね」と實の顔は段々晴れ々しくなつた。

「だから兄さん、早く晶子さんに打明けたら可いぢやないの？」

「爾しやうかな」

「直接に婚約すれば氣が済むは」

「それも爾だね、お前は？」

「私は臨機應變よ。五郎さんが厭だと言つても顔を捻向けて見せるは」

「あ、併し僕等は未だ學生だ。此那問題に心を痛める場合ぢやないのだね」と實は自ら
水に言つて「お前も少し氣を付けてくれよ」

「えい其の點は全く爾だわ」と菊子もしみじくと「でも晩かれ早かれ結婚の問題が出る

「しも爾だが」と實は遙かに橋の方を見やつて「あ、待つてるよ、そら晶子さんが洋
よ」

と菊子は聲を掛けた。

實兄妹は段々二人の方へ近付いた。其處にも大きな籠が幾つ
は籠で日光を避けて其處に坐つた。用意の餡パンやら乾酪やら

キツチやらが開かれた。
茶が欲しいな」と五郎は言った。
私行つて貰つて来るわ」と菊子が言った。
何處へ？」
「あら彼處の茶店へ行つて」
「私も行くわ」
晶子も起て一緒に歩き出した。

苦しみの中に月日が経て行く十一月の末となると上野の木立が疎らになつて不忍の池に枯蘆の影が寒く立つ、其の間に只だ喜ぶべきは父の大島隆二が保釋になつて箕面に歸つたといふ通知があつた事である。父の手紙は簡單である。
「私は健康が至つてよろしい。お前達は學校を勉強してくれ。何れ上京するが、其れまでに例

の事を考へて置いてくれ。楠大將へは私から手紙を出した」
父の保釋は嬉しいが、焦眉に迫つた結婚問題を如何に解決しやうか、五郎ははたと困つた。

「どうしても高井に打明けなければならん」

頃日高井と晶子との間は著しく隔たつた様に思はれる。高井の戀が募れば募るほど晶子は常惑して逃げ廻つて居る。併し高井は毫頭晶子を疑はなかつた其れは夕飯後であつた。月が上野の森を離れて晝の如く市街の屋根を照して又た池の面を照した。子供の群は家へ歸るを忘れ一齊に歌ひつ走りつ遊んでゐる。茅町の五郎の寓居は池に近い半洋の建築で、月光は窓の形なりに絨緞の上に落ちて、書架や卓子をもまざりと照した。頃日菊子は六絃琴の稽古を初めた。而して晶子の洋絃に合して大分上達した。

五郎は二人の美しい手が動くのを夢の如く眺めて居た。而して其の和かな諧調に溶けゆく我が靈に身を委して居た。音楽の音が竭んだ。

「ア面白かつたわ」と菊子は自分の恍惚境地から覺めて其の熱した顔に煩さく絡む後れ髪を指先で拂ひながら猶ほ張り詰めた氣分に名残を惜むもの、如く黙つて居る。晶子も同じく心

其の方を見やつた。神樂堂に木の枝の影が婆婆と映つて居る。並ぶ石燈籠の頭が次第下りに暗くと光の溶け合つた木陰に出没して、裸な木立の隙を縫ふ暗い電燈は淋しさうに遠く瞬いて居る。其の薄明りの間を帽子を前下りに被つて、のそり／＼重さうに下駄を曳すつて来る男がある。男は東照宮の前に立つて合掌した。何やら祈念を凝らして居たが躓て又歩み出す。而して花崗石の鳥居のある石段の上に立つて遙かに池の方を眺め、

「朝薇薔の花に盛る露を、汝は接吻す朝なく、おう太陽よ若人よ……」

極めて無器用な調子で遠慮深い様な而も嬉しさうな聲で唄つた。五郎はふつと噴飯した。

「おい高井君」
高井ははつと立止まつて、聲のありかを探る様に見廻した。

「此處だよ」

「うむ、君か」と實は笑つて「今日のヴァキオリンは實に面白かつたね。僕も巧いんもんだらう」

「巧いので驚いたよ。まあ人の居ない處でなければ唄はない様にしたまへ。君は何だか嬉しさうだね」

「うむ嬉しいよ」と實は答へた。

何が嬉しいのか實は只だほくほくして假令ば手に物が付かぬと言た風。

「何ならもう一つ唄はうか」

「御免だ、今夜は君少しどうかしてるね」と五郎は言た。

「どうかしてるよ、全くだ。僕はね、今夜といふ今夜」

「どうかしてよ、あ、止さう」と獨りで笑ふ。

「何だ其の今夜といふ今夜といふのは、新派役者の句調に似て居たぜ」

「今夜といふ今夜だ。君笑つちや不可せ、僕は打明けた」

「何を」

「晶子さんに何も彼も……」

「爾か」と五郎は吃驚しながら其れを隠して晶子がどんなに困つたらうと思つた。

「そうするとね、君、實は恥しい話だが僕は晶子さんの心を疑つて居たのだ。そうするとね」

「晶子さんはね、私の事は何卒兄さんに訊て下さい。私からは御返事が出来ませんと慥う言ふんだ」

「うむ」

「兄さんが結婚を承知してくれ、ば貴方に御異存がないんですねと僕は念を押した」

五郎は答へず深い呼吸を漏らした。晶さんは凡てを僕の方へ差向けてしまった。晶さんとしては断然断りにくいだらうから無理のない事だが、高井は其れを謝絶と知らずに承諾だと解して居る。あ、親友として此の男に失望させる事が出来やうか。實は猶も續けた。

「そうだらう、君に訊てくれといふのは即ち晶さんが承諾したと同じなのだらう。もどく君が僕に勧めてくれた事なんだからな」

「其れは爾だ」と五郎は氣の無い返事をした。

「君も喜んでくれ、併し僕は實に恥しかったよ。戀を打明けるといふ事は芝居や小説の様に容易くはいかんものだね、僕は眼を瞑つて言つたよ。只た今だ、観月橋の上で、言つてしまったから僕は一生懸命に走つた。實に妙な氣持だよ、胸がどきどきしてね」

「僕に訊てくれと言つたか」と五郎は底力ある聲で制へる様に言つた。

「うむ」

「だがねえ君、今となつては君に與ることが出来なくなつたんだ」

五郎は慥う言つた時、自分の額に油の様な汗が滲み出して脊髓骨が火の棒を突き通された様な氣がした。

「なぜだ君」と實は半信半疑で向き直つた。

「なぜでも君」

「おい、本當か」

「うむ」

「おい、本當か」と實は繰返す。

「うむ」

「本當か」

「……………」

「なぜ僕に與れないのだ。其の理由を聞かしてくれ」

「理由は言はれんよ」

「なぜだ」

「祕密だから」と五郎はもう穴にも入りたい様に耻ぢ入つて言つた。

「そんな事を言はずと僕に呉れよ」

「やられない」

「僕に呉れよ」

「高井……」と五郎は實の兩手を確乎と握つて、

「恕してくれ。高井、僕は悪かつた。僕を撲つてくれ、踏んでくれ、僕は君に其の上で語りた

い事があるんだ」

一九

何故か知らぬが晶子を與れぬといふ事だけは確實である。實はばかりと大地に坐り込んだ。木立を洩れる月影は其の垂れた首筋を照した。

「氣の毒だなあ」と五郎は心の中で歎息した。彼も最早慙うなつては致し方ないといふ決心から顔が熱するほど昂奮して居た。

「高井、僕は什麼處分でも受けやう、僕だつて恚那事を言ふのは什麼に苦しいか知れないのだ」

「どうしても不可のか」

「うむ」

「どうしても？」

「もう言ってくれるな、あ、僕は什麼したら可いだらう」と五郎は苦しきうに叫んだ。

「僕は什麼すれば可いんだ、僕は」と實も叫んだ。而して直ぐ兩手で頭を抑へて「夢の様だな

「あ」と低い涙聲で言った。

「元より僕は僕に不相應な事だと思つて居た。だから僕はどれだけ考へたか知れないのだ。迎も釣合はないから諦めるが可い。僕は慙う思つて自分を制したが、併し僕の愛は日にく募るばかりで今では僕の全生命が晶子さんになつてしまつたのだ。其の矢先に張り詰めた弓の弦が突然に断れた。餘りに僕は深入し過ぎただけに僕は自分で自分を什麼すれば可いか解らなくなつた」

「慙う言つて實は急に口を噤んだ。彼は此の場合に喁々しく愚痴を並べるのは餘りに男らしくないと気が付いたのであつた。五郎は黙つて只だ溜息を吐いて居る。

「可し、僕はもう何も言はんよ」と實は靜かに顔を擧げた。「だがねえ君、僕の問題はこれぎりにしてもう二度と言はない事にしやう。只だ妹の事だよ、僕はどうなつても構はんから、あれだけは幸福にしてやりたい。どうか宜しく頼むよ」

「さあ其れがねえ」と五郎は恰ら重罪犯人が次から次と罪迹を告白する時の様に、殆んどものを言ふ勇氣もなかつた。其の打萎れた態度を見て實は直ぐに胸を轟かした。

「其れも工合が悪いのかね」

「うむ、其れはねえ……」

「妹の方も不可のかね」といふ實の聲は激して居た。

「つまりね、僕等兄妹の事は關聯してゐるんでね」

「どういふ事情かは知らんが、君は菊子が厭になつたのだね」

「爾ぢやない、僕は菊子さんは厭でない」

「其れで結婚は出来ないのか」と實は突込む様に言つたが直思ひ返して「つまりあんな女だから君には勧めるのは氣恥しい事だけれども……」

「高井、僕は凡てを言なきやなくなつた。高井！僕は晶さんと結婚する事になつたのだ」

「なに？」

「僕は晶さんと……」

高井の驚きは絶頂に達した。兄と妹が結婚するといふ事は前代未聞の事である。

「どうしたんだ」

「高井、晶さんは僕の妹ぢやなかつたのだ。僕は其れを知らなかつたのだ。今度父の事件と共に父から仔細を聞いた。晶さんは楠侯爵の娘なんだ。父も侯爵も晶さんと僕を結婚さす意思なんだ。高井、僕は恚う聞いた時實に厭な氣持がした。親の命とは言ひながら今まで兄妹であつたものが夫婦になれべき筈がない。恚う思つた」

實は餘りの驚きに只茫然と五郎の顔を見詰めて居たが、今五郎が猶ほ言ひ續けやうとするのを遮ぐる様に言た。

「解つた、だが君は其れを聞てから妹とばかりは思へなくなつたらうね」

「其れだ、僕は謝罪する、僕は晶さんを愛してゐる事が僕に解つた」

「うむ」と實は起上つて五郎の腰掛に隣り合つて腰を下し、

「おい、握手さしてくれ給へ」

二〇

合點のかぬながらも五郎は實の差出した手を握つた。實は堅く握りしめた。

「それきり何んにも言はない事にしやう」

恚う言つて實に一二度手を振て放した時靜かに立上つた。

「さあ歸らう」

「君、僕の違約を恕してくれるか、僕は君を賣つた。君をどん底に突き落した」と五郎も立上つて實の前に頭を低れた。

「君に罪がないよ、お互に何んにも知らなかつた事だ。君も僕も自然に翻弄されたのだ」

「併し僕としては……」

「何も言はないといふ約束だつたぢやないか」

二人は歩いた。五郎は實に案外に意志が鞏固なのに感服した。男として青年として全生命を賭した戀人を失つた時、其の失望はどんなものであらう。彼は無言で居るだけに何事か決心する處があるのではなからうか、其れとも女々しき愚痴を止めて獨り血の涙を絞る積か、但しは自暴自棄の萬事を抛つ事になるかも知れぬ。何れにしても此の罪が我にありとすれば陰に陽に實の舉動に注意しなければなら

實は矢張り無言である。彼は自分の足先を見る様に首低れてのそり／＼と歩く、折り／＼彼は石に躓いて倉踉めいた。其度毎に苦笑して月を仰いだ。顔は夢の如く蒼白い。

「君、疲れてるね」と五郎は言つた。實は答へなかつた。而して二人は觀月橋を渡つた。突然何とも得知れぬ音樂の響が起つた。響は夜深の池水に傳つて更に紺碧に澄み渡る月の光に溶け入つた。

「あ、菊子さんと晶子さんだ」と五郎は言つた。實はひたと立止まつて其の音を聞き澄ました。ヴァキオリンと六絃琴の合奏！二つの樂器の音は次第に熱氣を帯びて來ると、夜陰の靜かさを透して果てもなき淡い哀愁の國へ誘ひ込む様、上野の森は眞面に月に照れて重なり合つた深みの暗みと月の光と和かに隙間々々に流れて居る。祠の影、橋の影、枯蓮の水に映る影、ものとあふ物の凡ての影は音樂の餘韻の中に出没して其處に微かな霧の末に消えて行く。

「あの二人は音樂をやつて居る。二人の兄は此那に苦んで居るとも知らずに」と五郎は思つた。「あの二人とても運命は決まつて居るんだ。明日になつたら菊子はもう樂器を手にしないだらう」と實は思つた。二人は何時まで動かなかつた。

樂器の音が止んだ。残る響は猶ほ水の上に霧に漂つて居た。

「蟲が鳴く、鈴蟲が鳴く」と菊子は唄ひ出した。

「流し元に月が射せば、冷たい壁に獨りが淋しい、誰が影法師に戀をして、ち／＼と蟲が鳴く。あ、蟲が鳴く鈴蟲が鳴く」

會日五郎が戯れに作つた歌を、何時の間にか二人で曲を作つた。其れは一時の出鱈目の作であつたが、冷たい壁に獨りが淋しい！菊子の運命を暗うするのは何といふ慘酷さだらう。五郎は恚う思つて溜息を吐いた。

「さあ入らう」と實は言つた。二人は門を入つた。

「君は先に」と實は言つて、五郎を入れてから獨り門を閉めに掛つた。靜かに潜り戸を引いて鑰を下したが、其の手を其儘に突張つた上に彼は自分の顔を押付けた。而して凝と足元を見詰めた。涙はぼとり／＼と地に落ちた。羽織も着ぬ背中の上を月が隈なく照らした。

五郎は眠られなかつた。うとうととなるかと思ふと直眼を覚ます。又眠る、又覚める、三度目に覺めた時彼は二時の時計を聞いた。其の頃から風が出て雨戸がたたく鳴り出した。彼は猶ほ眠れなくなつた。上野の森が汽車の過ぎゆく様にざあ／＼と鳴つて居た。不忍の池の鴨が折り／＼嵐に舂めき合ふ聲も聞ゆる其等の聲のもつと遠くに南京蕎麥の笛の音が聞えた。此頃晶子が學校の歸り途に例の朝鮮人が南京蕎麥を賣つて歩いて居たのを見たといふ事を思ひ出した。而して汽車中のことを思ひ出した。

「哀れな朝鮮人だ」と彼は考へた。と此の考への纏まらぬ中に彼は襖一重を隔てた隣の實の室に泣聲を聞いた。彼ははつと思つた。

「仕方のない事だ諦めてくれ」と實は言つた。

「厭ですわ／＼」と菊子は泣聲で言つた。

「厭だと言つても仕方がないぢやないか」

「仕方がなくなつたつて私は諦めません。諦めるなんて其塵卑劣な行爲はしませんわ」

「靜かにしてくれ」と實は制する様に「其れは何んにもならない事だよ。誰が悪いのでもない、運命だからな、なあ菊さん、お前と僕とはどうしても慙ういふ宿命を有つてるのだ。お父さんだつて一生日蔭で果てたらう。其れを思へば今まで愁ひに人並の望みを却……(泣く……)だよ。なあ菊さん、お前ばかりぢやない。兄さんも同じなのだ。泣くなら

いか」

「私は泣きませんわ」と菊子は泣聲で言つた。「泣くなんて……私は泣きや五郎さんを愛してれば可いのです」

「其れが不可いんだよ」と實は溜息と共に言つた。

「兄さんだつて、あんなに晶子さんを愛してるんぢやなくつて、其れを今兄さんは晶子さんを愛して居ないの？」

「愛してるよ、僕の生命よ」

「愛して居るのに何故諦め

と實は力を籠めて言つた。

「愛して居るから諦めるんだ、僕は本當に好い氣持で諦める事が出来たのだ、
「どうして？」

「菊さん、お前は世の中に何が一番幸福だと思ふ」
「愛する人と結婚するのが」

「爾だらう、其れで可い。だが若し自分が其人と結婚すれば其人を不幸にする
什麼だ」

「自分が幸福であれば其人も必ず幸福ですわ」

「いや爾ぢやない。假令ば晶さんが僕の妻になるよりも五郎君の妻になる方が幸
什麼だ。五郎君は身分もあり學問も出来る。頭腦も可い、人格は拔群だ。何れの點より見ても
僕より優つて居る。して見ると晶さんが僕の妻になるよりも五郎君の妻になる方が幸
だ。可いか、解つたか、人を愛するといふ事は其人を幸福にする事だ。其人を幸福にするため
には自分の慾望を棄てなきやならんのだ。其れが本當の愛だ」
「其那愛は詰らない愛ですわ、戀人を自分の所有にしない位なら、愛といふものは無意義です

わ

「いや〜爾でない。我が子が溺ようとする場合には母は直に水に飛込む、自分の危険を顧み
る暇もなく只だ子供を助けたさが先に立つ、これが本當の愛だ。御父さんは、陛下の御眞影を
護つて焼けて死んだ。其れは陛下に對する愛だ。愛する人を幸福にするには自ら犠
は當り前の話だ」

「其んな事は古いわ。兄さん、私は人間ですもの、私は生きてるんです。私に血も
あり感情もあり慾望もあり理想もあります。どんな人だつて最善を盡せば必ず良人
にする事が出来ますわ。其の目的があればこそ人間は生きて行くんぢやありません
んで私は厭です。私は五郎さんを幸福にして見せます。晶子さんよりも幸福にして
私だつて其れだけで生きてるのです。兄さん、私は御父さんに別れて其れから基督
時にも親類や何かで私から神様を奪てしまつたぢやありませんか。私は御父さんも
なく何んにも無くなつて漸く今度五郎さんを生命の綱と捉まつたのに其れも奪てし
ふのは餘まりですわ。世間では私達に何をしてくれたでせう、何んにもしてくれま

は世間に氣兼ねる義務がありません。犠牲なんて其那馬鹿々々しい事は道德を賣物にしてる人の噓言ですわ」

「其れは餘りに利己主義だよ」と實は懇に諭す様に言つた。
 襖一重の隣室に寢て居た五郎は片唾を呑んで聴いた。

二二二

五郎が聴いて居るとは知らなかつた。實は靜に續けた。

「ねえ菊さん、僕にして見ても實に辛い。お前の事を思ふと猶ほ辛い。併し僕等は御父さんの子だ。御父さんは愛の犠牲を人間第一の美德とした。而して其の主義に倒れた。僕等も御父さんの志を失はない様にしなければならん。ねえ菊さん、僕等の身分を考へて御覽、貧乏な小學教師の子ぢやないか、其れに引替へて晶さんは侯爵の令嬢だ。而も二人の親と親が許したのだ。僕等とは全然身分が違ふ。今此處で僕等が強て慾望を遂げた處で、其のために五郎君の家庭にごたくを起させ、晶子さんを苦め五郎君を苦めるのは決して愛人に對する行爲であるま

い、そこで僕等は寧ろ喜んで五郎君と晶さんの結婚を祝福すべき筈ぢやないか。二人が幸福になれば僕等は何より満足だ。十字架にかけられた基督は肉の苦みが多大であつたらうが、併し其のために幾億萬の人類を暗から救ひ得た喜びはどんなであつたらう」

「解りました」と菊子は言つた。

「解つたか」

「でも私は犠牲は厭です。五郎さんの一家の事情で結婚が出来ないといふなら私は止むを得ない事だと思ひます。晶子さんの結婚も止むを得ない事だと思ひます。併し私は決して私の戀を諦めはしません。そればかりは兄さんに言つて置きます。私は只世間の暴力に負かされただけです。私の精神は少しも讓歩して居ません」

「それぢやどうする積だ」

「私は只五郎さんを愛してれば可いのです。五郎さんが什麼思ひなさらうと、又生涯結婚が出来なからうと其れは仕方がありませんわ。私は死ぬまで五郎さんを愛して居ます」
 「其れぢや生涯獨身のつもりか」

「まあ爾なりますかね。ですが兄さんだつて少しは新しい人でせう。豈夫私を世間普通の奴隷的婦人の様に御飯を食へさして貰ふために人の妻となれとは仰有いますまいね」
 「其の點は爾だが、併しお前が生涯獨身で、……」と實は手を額に當てた。
 「兄さんは？」

「僕も……」

「矢張り生涯獨身の御つもりでせう」

「僕は男だから構はないが……」

「女だつて同じですわ」

「爾なると高井家の血統が絶えるね」實は落膽して机に凭れて兩腕の間に顔を埋めた。
 「血統なんか、兄さん、人間は種馬と違ひますわ」

實は答へなかつた。菊子は黙つて疊を見詰めて居たが聽て靜かに顔を上げた。

「兄さん、私日本に居るのが厭になつたわ」
 「なに？」

「何處かへ行きませうか、ヂブシーの様な生活がして見たい。私はもう普通の人の出来ない様な強い戀を経験したんですものこれで私の生涯の終かも知れないわね。西から東、沙漠を超えたり海を渡つたり、落葉が雨の様に降る下に天幕を張つたり、爾いふ放浪の旅を續けながら遠い國から五郎さんを思つてる方がどんなに可いか知れやしない。兄さんお金があつて？」

「もう殆んど無いよ」
 「では行きませう。若し旅で困つたら私身賣をするわ。藝者だつて女郎だつて何だつて構はないわ」

「菊子！」と實は起上つて菊子の片手を確乎と握つた。「お前は自棄になつたね」

「い、え兄さん。私自棄になる程弱くはないわ」慙う言つたが凝と兄の顔を見て涙をぼろろと零した。

「兄さん、御免なさい。私今一寸そんな事を考へただけよ。兄さん、御免なさい」

「可いよく何でも好きな事を言へ、泣きたければ泣け、泣いたら少し氣が安まるだらう」
 慙う言つて實と共に涙を零した。電氣は明るい。室は蕭やかである。外の風は益々吼へて居

る。

二三

隣室に聞いて居た五郎は息をも吐けなかつた。彼は何とも言へぬ嚴肅な氣に打たれた。其れは殆んど人間の言葉でなくて神の言葉である。高井が妹を諭して居るのでなくて、何かしらん偉大な聲が凡ての人の心を刺つて居るかの様に思はれた。

「實に立派だ。恁那立派な男を見た事はない」

彼は再び耳を敬だてたが音がない。彼は天井を見詰めて高井の態度を想像して見た。沈黙で謙遜で暗い顔をして居る高井の姿が眼に浮ぶ。

「自分の戀を捨て、も晶さんの幸福を望む。こんな美しい心は普通の人間にあり得るだらうか菊さんの心は凡ての人の心だ。獨り高井は什麼して恁ういふ立派な心を有つてるのだらうか」

彼は靜かに前後を考へ初めたあれほどまでに熱烈な愛が一朝にして破れた其れは到底男として忍び得べき事でない。此の場合に多くの人は先づ僕を恨む、晶さんを恨む、世間を恨む、次

に如何にして自分を處置せんかに苦しむ、死なうか生きやうか酒を呷らうか外國へ走らうか、歸着する處は是である。然るに彼は此の霹靂一下の場合に毫頭自分の事を考へなかつた。彼の第一に考へたのは晶さんの事である。晶さんが幸福になれば其れで可い。彼の考へは晶さん本位である。自己の慾望よりも相手の女を幸福にする事が彼の戀である。

「相手の女を幸福にするのが戀である。何といふ男らしい思想だらう」

五郎は此に至つて思はず背骨から後頭部まで汗が催ふして來た。

「高井は僕に戀を譲つた。其れは他に理由がないのだ。僕の妻となる事が晶さんの幸福だと信じて居るからだ。高井は僕を自分より立派な人間だと思つて居る。そして僕でなければ晶さんを幸福にするものは無いと信じて居る。處が、處が……」

彼は思はず肩を窄めた。

「僕は果して高井の信するが如き人間だらうか。僕は晶さんを幸福になし得るだらうか。若し其の資格がないとすれば僕は高井に對して愧ぢねばならん。少くとも高井は僕よりも高潔である。今日の態度の如きは到底僕の及ぶべき處ではない。晶さんを幸福にするものは蓋し高井か

も知らん」

五郎は呼吸が詰まる思ひをした。隣室では高井の小さな優しい聲がする。
「風邪を引くよ菊さん、床に入つて御寢み」

「い、え眠つちや居ない事よ兄さん」と菊子もいつになく打萎れた聲で言た。

「兄さん、私達は呪はれた宿命に生れたんですわね」

「お前は苦しからうな」と實は歎息と共に言た。

「あ、僕はあの兄妹を地獄の底に叩き込んだのだ」と五郎は思つた。森の嵐は止んだ。南京蕎

麥の笛が悲しく聞えて来る五郎は愕然と顔を擧げた。

「僕は朝鮮人なのだ」

探しものを一生懸命に探し廻つても解らず突然自分の袂の中から出た様な氣持で五郎はいつ

も解りきつてる事實を一大発見の如く驚いた。

「朝鮮人！」

彼は一二度口の中で繰返した。

「僕は朝鮮人だ。最も人に卑しまれる朝鮮人だ。朝鮮人と雖も耻づべき筈がないかも知らんが併し高井は自ら身分の卑しきを以て戀を譲つた。僕は高井よりも卑しい身分だ。僕は高井に耻ぢねばならん。可しツ、決心した。僕は戀を捨てやう」

嗚呼 人間の心は感歎いあるよ

暗
涙

門並の注連吹く風がざわ／＼と渡れば松に閃めく日の光が明るう、振袖の友禪に追羽子の御嬢さん達の髪も輝いて、通りすがりの禮者の羽織に袴に春の氣分が漲る。萬歳が行く猿曳が行く、鼓の音、三味線の音、箱屋を伴れてちらほら辨天詣りの藝者や旦那も見ゆる流石に池の端の正月は艶めかしい。

「どうしたのだらうね。もう歸りさうなものにね」

此の暮から上京した母の松子は大島揃の肥つた身體を安樂椅子に埋めて手焙に手を翳す。

「もう御歸りですわ。昨夜も新年宴會でしたから」

晶子は生れて初めて島田に結つた。艶々しい黒い髪と色白の首筋は錦繪の様に美しい。彼女

は上方風に口紅を濃く塗けたので、ものを言ふ度に紅い唇から白い歯が微に覗かれる。黒地に羽衣の模様を染めた紋付に西陣の帯を締めて頭の重さに慣れないので少し俯向き加減に窮屈らしいのが却つてしとやかさを加へて見える。

「併し私か來てから今日で七日になります、たつた一日酔つて歸つたきりで碌に話も出來ず三晩も四晩も續けて歸らないでは新年會ばかりだとは思へませんね」

松子は何事かを訊問する様に晶子の顔を見い／＼言つた。

「でも兄さんはお友達が多ふございますから」と晶子はもちもちして言ふ。

「晶さん」と松子は押へる様に、

「お前は私に隠してゐるのぢやありませんか」

「何を？御母様」

「何を？五郎は此頃放蕩をやり出したのでせう」

「いゝえ」

「いゝえぢやありません。私は知つて居ます。でなければ此の暮に何百圓といふお金が要る筈

がありません」

「でもあれは本を買つたり……」

「本を買つたのなら本は殖えなけりやならない筈です。去年よりもずつと減つて居るぢやありませんか」

「ですけれども……」

「お前の指環は何にしました」

「あのう、直しにやりました」

「い、え兄さんに貸したのでせう」

晶子は黙つた。母に言はる、までもない、此頃の五郎の態度はがらりと變つた。酒を飲む、外泊をする、家に歸つても全然しみぐと話す事もない。高井が屢々口を極めて忠告しても聽入れぬ。松子の上京を促したのも畢竟高井の忠告であつた。

「早く晶さんと結婚された方が可いでせう」と高井は勧めた。松子も元より其のつもりで来た。朝鮮から楠侯爵も一兩日中に來る事になつて居る。併し五郎の此の状態では父が何と言ふだ

らう、侯爵も何といふだらう、老いたる母は其ればかりが氣懸りである。

「ねえ晶さん、お前が兄さんを庇ふ心持は能く解つて居ますが其れでは兄さんの利益になりませんよ、どうせ侯爵が御見へになれば直ぐ祝言を濟ますつもりなんですからね」

「でも母様、兄さんが……」

母はちらと晶子の顔を見やつて早くも其の言はうとする處を悟つた。

「お前には優しくするだらうね」

「い、え」と晶子は首を掉つて横を向いた。

「お前にも辛く當る！」

「私ね、私は什麼して可いか解らないんですもの。私が厭だから放蕩をなさるのぢやないでせうか」

母は屹と眉を擡めた。